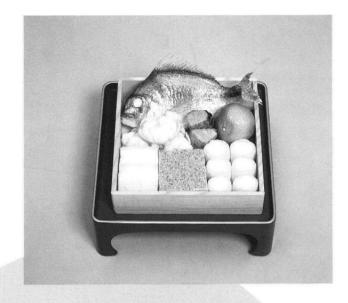


『信濃の風土と歴史4 近世の信濃』正誤表

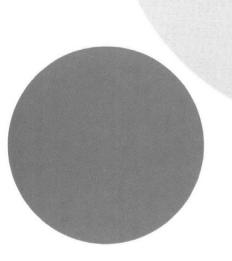
近世の信濃しと







婚礼の祝い膳(長野県立歴史館蔵)



長野県立歴史館

は自 とは 江戸時代の 体 古代・中世より庶民の暮らしが豊かになったことを示しています。 制 が 確 立されてい が国は鎖国によって国 ました。 江戸初期それまで二食であった食事が三食になったこ |際社会と隔絶されたにもかかわらず、 国全体として

部では大麻を栽培してそれで衣服を作っていました。 ちは畳を敷いた書院 造に住んでいましたが、庶民は板の間の柱割りの家に住んでいまし キビ・ヒエなどの雑穀やダイコン・カブなどを入れた糧飯が一般的であり、 らも綿花 チやナラの実さえ主食の一部になっていました。 しかし人口の八割以上をしめた農民の主食は、大麦と米をいっしょに炊い 衣料は近世初めから綿花が信濃でも栽培されるようになり、 (繰りれた) が移入されて、 庶民の衣生活も麻布より快適になりました。 また住宅をみると、 また尾張・三河・ 武士や豪農・ た麦飯やアワ 山間部ではト しかし山間 越中か 豪商た

な開 句などの上層文化が生まれました。特に信濃では多数の寺子屋が開設されて、 色づけたものに文化があります。江戸時代の信濃は風土が多彩なうえ、 蚕種などの二次加工も発展しました。このような生産力の高まりの中で、 六割までが たことがわかります。 ました。 国]全体では江戸後期になると新田開発が停滞しますが、信濃では後期になっても大規模 領 発展させた近 発がおこなわれています。この事実から農業生産の規模拡大が幕末まで進められ 天領 ·識字階級であったといわれています。『信濃の風土と歴史4』には、いまじ 地域 (幕府領)・社寺領に分割されていたために、 性 世における人びとの暮らしと文化がやさしく書かれていますので、 の強い農耕文化の上に、 また綿花・菜種・繭などの商品 祭り・ 歌舞伎 生産が盛んになり、 人形浄瑠璃などの民俗芸能、個性の強い地域文化が形 ーーの 綿布・種油・生糸・ 信濃 成年男子の の社会を特 領の 経済を大 が 成さ や俳 ΙĪ 7 か

九九八年三月

館長 市川 健夫

目

はじめに

目次

概説 江戸時代の年号 江戸時代と近現代

よりよい暮らしをもとめて―江戸時代の日常

: 9

食生活が豊かになった

水道のはじまり

江戸時代の婚礼 夜の世界がひろがった―照明文化のはじまり

木綿時代のはじまり

今につながる年中行事 庶民の女性も美しく―化粧する百姓

老後の生活をどうしたか

社会生活の進展―武士と庶民

25

村立文書館のはじまり サラリーマンになった武士たち もっと休みを―村で決めた村の休日

医療のひろがり 安全な暮らしへのそなえ―町や村の火消し マス・メディアのはじまり一 新聞のルーツ

自立をはじめた女たち

40 38 36 34 32 30 28 26

 $24 \ 22$ 20 18 16 14 12 10

3 8 6 4

参考文献

協力者のみなさん・あとがき

テーマ3

名物の誕生とひろがり―産業と流通

信濃国の産物を運んだ中馬―宅配便の起源

旅行のはじまり―庶民が求めた快適で自由な旅 村人の土木工事――快適な道路づくり

名所・名物の誕生

登山のはじまり 信州の紙幣―信用経済のひろがり

宣伝広告のはじまり

木曽の森林はどのように育てられたのでしょう

生活文化のたかまり一 庶民文化の発達

俳諧が庶民にひろがった

絵を描く庶民たち

信濃国は十州に―郷土研究のはじまり

自然を観察した人たち

出版文化のひろがり

教育県の源流

芸道のひろがり

年貢を軽くするために 気象観測のはじまり

江戸時代の政治改革―藩政改革

村役人は選挙で

48 46 44 42

78 76 74 72 70 68 66

. 65

64 62 60 58 56 54 52 50

49

80 79

江戸時代と近現代

日常茶飯事の歴史学の主張も市民権を得てきにおじょうなはんじ 歴史研究も求められています。 ました。 生活をより豊かに描き出そうとする、 歴史学にたいして、 する研究などがでてきました。 再考する研究や、 古代・中世・近世・近現代という時代区分を ととらえ、 近の歴史研究をみると、今までの原始 生死や病苦など人の その政治的 明治時代の国家を国民国 流通や消費の面から庶民 土台の形成過程に 'n. 政治史中心の 情を描きうる わば 注 目

う視点で江戸時代をながめてみると、 が見えてきます。 につながるさまざまな社会事象、 な営みが社会を変え、近現代を準備したとい こうした研究状況のなかで、 庶民 組 0 近現代 日常 文物 的

奉行など民政や財政担当の組織がつくられて 代藩主忠晴の寛文・延宝期(一六六一~一六 ていた武士は、 11 に携わるようになりました。高島藩では、 ハ一年)までには、 ます。 江戸時代になると、 II ぼー七世紀後半までには信濃諸藩 役人として俸禄を得て行政等 郡奉行や町奉行、 城下町に集住させられ 勘がんじょう Ξ

> しました。 の藩政機構が整備され、 官僚的な制度が確 立

ほか、 守ることが認識されるようになると、 争い 現用文書と非現用文書とに分類 引継文書量が増加すると、 的な契約も文書でかわすようになりました。 係書類や裁判書類、触書などの公的な書類の 書がつくられ、 支配するようになりました。 諸大名は、 保管するようになりました。 公文書は村役人が代々引き継ぎましたが、 庶民にとっても、文書による契約が権利 官僚的支配は、 の記録やきまりなどじつにさまざまな文 借 金証文や縁組・ 文書によって広い 村や町に伝達されました。 文書による支配といえます。 相 続・ 諏訪地方の村では 年貢徴収や境界 地域を統 離婚などの私 郷蔵など 年貢関 一的に

さです。 に六一六三人も が高まり、 ました。 文書による支配が進むと、文字学習の 信濃の寺子屋師匠は明治の初めまで 各地に寺子屋(手習所) 知られており 「全国一」 が生まれ 需要 の多

一ハーハ年

(文化一五)に小林一茶がつく

るのは

自

由民権運動や大正デモクラシー

にみられます。 る村もありました。「教育県」 11 と教育熱心な親の姿が思い浮かびます。 った「なまけるなイロハニホへト散る桜」と う俳句からは、 師匠を招 いて村の費用でその教 場 村の中での教育熱の高まり の源流がここ 場を建て

頃以降、 るようになりました。そこで公平を期して入 まれました。 正とか、 札という選挙で村役人を選ぶという慣習が生意 大多数の農民とが村政運営をめぐって対立す 村役人は代々世襲でしたが、 村役人家の没落などで、 世襲的な村役人層と小前と呼ばれる 年 一八世紀中 貢負担 一の不

が有権者名簿に登録されていました。一八六。。 は、 〇年(安政七)長窪古町(長門町)の入札で 第7日 選挙権がありました。一八六三年(文久三) は信濃全域に広がり、 はじめに、 しかし、入札による村役人の選挙は、 の入札においても、「宗太夫後家」など三人 の佐久郡下海瀬村 れました。 入札による村役人選挙は、 買収に応じた後家が記録されています。 婦人参政権が認められるようにな 区長・戸長の官選制により否定さ (佐久町)での名主と組頭 戸主であれば女性に 江戸時代後 明治の 類に

1:

して 日 治 共 後 性 0 0 11 的 同 F 1= 江 期 総 婦 to 主 增 結 責 F 0 選 人 合は 村で 任 時 村 0 挙 運 7 代 て 0 村 0 動 决 負 高 は 文 政 時 を め、 う 化 か、 か らて 0 2 0 て 村詩け たの 若 貢 参 自 す。 者たち 納 治 加 7 制世 を 入 的 /\ 九 す。 こう や 認 な 四 三年 0 て 諸は 結 8 六 して 要 村 L 役等 合 7 年 など 求 た 11 0) 0 みる た江 文化 遊 か 高 昭 を よ U b 7 ŋ 日 村 村 F 時 0 民 注 だ 自 代 女 休 かい 目

1778年(安永7)の井上村(須坂市)の名主入札と結果記録。 磯五郎が111枚で名主に当選した。(須坂市 坂本康之蔵)

付 村 す

> do 商

5

n

1 旅

六

t 安

優応 1=

E

富 ŧ

輸

送

+

0)

0

do

1=

道

路

整

備

す 倉

飯

Ц

市

0

村

人

to 年 全

高

2

商 は

人

などで富倉峠

石

畳

0

舗 田

装 町

道 な

か 0

<

b 0

ての かい 活 1 0) をおこなっ 発であ 7 あ 桜 歌か ŋ 沢 青 年 舞ぶ ŧ 村 伎きや 0 4 L たと 7 た。 運 野 動 人 形 祭り や ました。 市 芝 えまし 農 居、 7 村 0) は 演 日 ょ 劇 花 年 江 1= う。 P 運 火 は 間 後 to 動 若 五 期 相意 者 かい 撲 た 現 1= 日 代 興 5 ŧ 行き よ かい 0 n 地 な 化 休 ŧ 域

> 良 んに

的 な

な 織

屋を

あ

たの四

花ゎ年

文 民

化

1= X

は

講さ

う 元 旅

旅

館

ŋ

ました。

合

0 10

組

ŧ 宿

<

5

11

松

城

丸

御

か、

城 1=

町

0

樋ひ町

まし

た。

寺

社

参

詣

を名

目

庶

0

ŧ

酒前 2 礼於 費生活をささえました。 ŧ かい た 江 村 0 F 80 札 茶れだれた < 時 飯 1= 両り 5 宿場は 田 代 になどの 藩藩札 0 n 替 金貨 ました。 札き 商 など かい 商 5 品券も 南 銀 0 ま 貨 信 地 n 13 域 地 か、 発 域 限 銭 定て 現 貨 行 1= 各 在 X 3 0 城 1 通 0 貨か れ T 用 銀 幣へい 2 町 す 庄 b 行 0 民 7 n 3 0) 交 紙 ŧ 換

> 庶 0

民 I 農 立 発 発

0

自

然 農 産 t

観

察も

す

2

経

験 技 品

かい

記

録

夫、

具 を

0

進 do 以

步

など農

業

術 種

かい

発

達

業生

高

る

た

8 考 松

1=

改

良や

肥

料

れ

町 幣

0

成 かい 屋

は 掘 掘 本

世

紀 11

降

えら

n

7

ŧ 道 あ 下

3

n

7

ます。 井

本 40 II ŧ

7 水

0) 道 松

上

水

施

設

調

查

て 0 0

F 殿 n 0

0 跡 7 85 1

管 本

たる

桶が 0)

消

ŧ

L

宅 資 庶 類 11 1= お茶 が流 民 荷 配 わ 省 便 0 酒 n 物 幣 食 0 を 通 経 3 たばこ 生 は 積 L 瀬 輸 済 P んて まし 活 じまり 0 送 かい 物 手 発達により、 た。 なと 豊 類 段 直 7 か、 かい 接 す。 1= 海 かい 発 相 とくに信 なり 達 産 信 手 物 濃 中 L 先 まし など まし 玉 馬 さまざま とと 濃では、 外 1= よっ た。 かい ŧ 運 17 たら は て、 な 11 る 中ち 馬 n わ 人 X 米 ば 馬きま to 0) n 塩 穀 物

鞠り民 T 追 t 俳 t 緒 江 能 伝 分 年 書 7 1: 0 ・うたい えら 楽し など てきま 1: F な 時 II 弘 軽 め とに 代 n 井 化 0) むよう 花道などを武 0 7 沢 地方 後 四 L 文 町 期 出 た。 11 化 版文 ŧ 1= 0) 出 が各 す。 善 地 0 版 な 信 ŋ 化 をささえまし 域 丸 光 濃 地 的 ŧ 地 屋 寺 士 各 1= 40 1= 高 方 0 大 西 地 発 から ま 瓦 洋 町 ŧ 地震を 1= 達 階 0 版 絵 人、 書 7 は 層 0 画 店もう 的 情 名 伝 た。 を学ぶ 農民ら 11 える 俳は ま 古 1= 報 L 屋 語が よ 発 ま た。 to U 信 信 1 農 る n 3 民 主 州 四

るよう 江 F 時 代 なり 後 半に なる L 庶 民 0) 手 蹴け庶

玥 かい 代 0 t とつ 庶 民 ながりました 0 生 活 文 化 は 3 様 1= 展 青木歲 開 L 沂

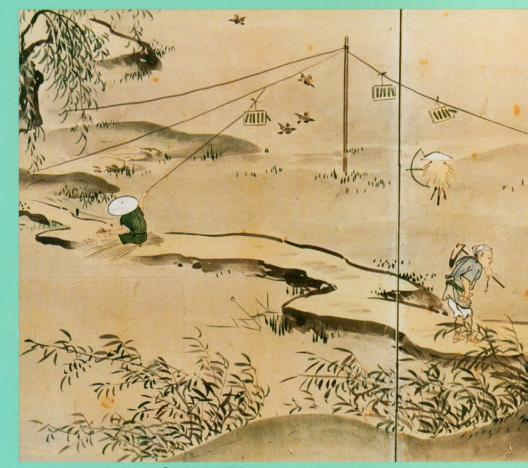
湯 大学 原老我 またん Trees ! 15 50 1

					19												8											1	7						16	世紀
一八六五年	六四	六一	六〇	五四	四八	四四	三〇	一八	0	0	八九	ハー	七二	六四	五一	四八	四四	四一	三六	一六		0	ハハ	八四	ハー	七三	六一	五八	五五五	五二	四八	四四	二四	五五	九六	西暦年
けいおう	んじ	んき	んえ	んせ	えい	うか	んぽ	んせ	h	よう	んせ	んめ	んえ	いわ	うれ	んえ	んき	んぽ	んぶ	よう	よう	うえ	んろ	よう	んな	んぽ	んぶ	んじ	いれ	よう	いあ	よう	んえ	6	11	号
応う	台	久	延	政	永	化	保	政	化	和	政	明	永	和	暦	延	享	保	文	保	徳	永	禄	享	和	宝	文	治	暦	応	安	保	永	和	長	年
慶う	工	文	万	安	嘉	弘	天	文	文	享	寛	天	安	明	宝	寛	延	寛	元	享	正	宝	元	貞	天	延	寛	万	明	承	慶	正	寛	元	慶	



一八三五年(天保六)に刷られ出まわった信濃国の絵図 (長野県立歴史館蔵

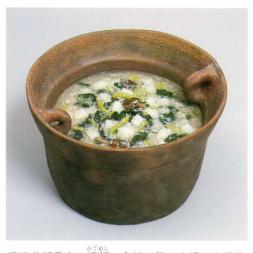
よりよい暮らしをもとめて一江戸時代の日常一



百姓の四季の労働を描いた「四季耕作図屛風」(部分 長野県立歴史館蔵)



食生活が豊かになった



近世前期農家の糧飯。食材は稗と大根と大根葉 である。(長野県立歴史館蔵)



「泉湊伊織」の刻印のある焼塩壺 (長野県立歴史館蔵 複製)



粟

蕎麦

四

13

四分に大根と大根葉のほ朝は大麦香煎(煎った

た粉





日ひ

向至江

時代

初頭の一六〇

年(慶長

0 黍が佐

郡

大お

日三食のはじまり

げ

稗さ村

菜な佐

大豆が

久町

0 栗が畑・作

牛蒡等の畑作

蕎きば

とと

作

物が記され、

雜

穀

の食生活がうかがえます。

(市岡嶢智「本草図彙」 飯田市美術博物館蔵)

とくだって、

一八三〇年(文政一三)、

伊

那

郡

冬の間

は

蕎麦焼き餅、 栗矢村 子汁 ると 日に 日三食の習慣日三食の習慣 稗をい 一度ずつ 朝 饅頭・麵類などが出され多様化しました。まんじゅう めんるい (阿智村) 豪農の れた糧飯で 昼 一・小昼・タとヨモ、 に。農作業がさかんになる春彼岸から にできる。 でがん になる春彼岸から でできる。 昼飯は 食事 は 慣 家 の農民の食事をみると、 日四食をとるほか、 米 0

食卓塩がはじまった

お

祝

0 膳に

は白

飯だけでなく

米の混合率

かい

江

P

時代から始まり、

後期

から

粉

寸

上田市) 六五一年 (慶安四) の有力農民が購入した食料品に 七く 月 0 小ちい 刺き舞り 田た 鯖ば村

10



佐久郡の有力農民が使用した1755年(宝暦5)の銘があるお 椀 (長野県立歴史館蔵)



の床にある越前屋で名物の蕎麦切りを食べているお客 (株)郷土出版社「十返舎一九 信濃紀行集』より。

や名古屋方面

から蜜柑・

石少

葛

.

七六四年

(明和元)

ごろに

紀伊

玉

和

歌

山

か

あ

n

海産

物

が乾物

1

の干物)・塩・煎じ茶・りんご・

素麵

.

ゆず

11

するめ

かなどがあ

りました。

すでに

煎じ茶で

高橋孫左衛門蔵) 遠とおとうみ ら塩 油粕 れました。 喫茶の習慣 食卓塩のはじまりです。 鯖

国

静岡県

から気田

たちゃ

塩魚・そうめ

2

・醬油・

味時で

かつおぶし

甲

府方面

か、

節

干

魚

を自分の家で製造しています。 食生活のたかまり (醤油) 酒 味明で から 0 小小 漬け・ 林 09

戸

中期

大町村

大町市

の栗林家では、

納

豆

なす糀漬けなず

でつくられた焼塩壺

(精製塩容器)

が出ています

松本城二の丸御殿跡

からは、

湊

大

阪

いずみみなと

菓子類・こんぶなどが中馬荷物としてもたらさ

ちゅうま

走き 調 行などが記されて ろからの 佐久郡八満村 宇治茶の流通、 嗜好品、 には、 飲酒 の流行、 文化・ (小諸市) 食器類にいたるまで、 L ます。 饅頭屋や肴屋 うどんに 文政

期

0

四~三〇年)

郎

左衛門著

きり

かい

わ

る

蕎

麦

切

ŋ

0

馳

食生活は豊かになりました。

幕末になると、

のように、

主食に限

0

增

カロ、

輪島塗り

0

庶民

0



松本町の水源だった井戸。竹製の水道管が出ている。 (松本城三の丸跡土居尻遺跡)



竹製の水道管 (松本城下町跡伊勢町地点)



竹管のジョイント部分(松本城下町跡伊勢町地点)

て水道ができてい

信濃では、

松本の城下

町の発掘調

査によっ

なわれた松本城三の丸(

三の丸(武家屋敷)・たことがわかりまし

伊山

発掘

は湧水の豊富な地点でした。

この自然条件を利用

七世紀には武家屋敷や町人町に水道が整備され

飲み水と城下町の整備

用水を得ていました。

「は、大種のとする諸都市では、大種などで水を引いた。」

「は、大種などで水を引いた。」

「は、大種などで水を引いた。」

配水のしくみ

ていたのです。

自噴し、桶になったかまになって、脈ませれから一 木樋 九世紀になると、底なしの桶をい 道の末端や屋敷内 松本城三の丸の トル、 (長さ三~五メートル)に通します。さらに、 水脈まで掘りぬく技術が使われました 桶にたまった地下水を、 長さ三~五メートル)が使われました。 八世紀にかけて、 の配水には竹管 配水のし くみをみてみまし 底なしの桶を数段重 桧や赤松で造られた vone あかまっ くつか使うのではな (太さ五~ハセンチ 図| 水 ね





地下水を集める桶(松本城三の丸跡土居尻遺跡) (この項の写真・イラストはすべて松本市教育委員会提供)







木樋のジョイント側面にあった 1846年(弘化3)の墨書。

屋敷

中に上水を引くことができるように

下水脈に

のばすようになりました(図2)。

の桶ひとつを埋め、

底に穴をあけ、

竹管を地

水道の普及

があると思います。

世の城下

田丁

0

発掘が進むにつれ新たな発見

見されています。このことから、

上水を木樋などに

伊

勢町

の発掘では井戸

はなく、

竹管や木樋

0

みが発

てかなり離れた場所から送ったことも考えられ

水処理をした水を鉄管などの導管によってのかれての対策として、沈澱フスや赤痢流行の対策として、沈澱 認されましたが、 とをは このように松本城下で現在の 日 がりました。 本経済の発展にともなっ 痢流行 その後、 明治期における県内 は数 九五 政 府 五年 明治末期 セ 水道 111 昭 0 和三 水道 から あたる施設 大正期 0 て供給 水 道 に四三パ 普及率

九〇パーセント台になりました。

九六九年

昭

和

四

四

になってようやく





婚礼の時の娘の衣装(長野県立歴史館蔵)

どであったものが、

ついて小諸の小林四郎左衛門正美は「文化の末ごろ

八一〇年代)には結納の品が、

小こそで

带、

腰帯な

結婚を約束する儀式を結納といいます。この結納に

婚礼と費用

新婚旅行など、さまざまな費用がかかります。 といわれています。結納、 ごろからでしょうか。 や披露宴に多額の費用をかけるようになったのはい 現代の結婚式や披露宴などにかかる出費は数百万円 婚礼家具、 衣装、 結婚式場 結婚式

料品が贈られていますが、 0 きたお祝いの品は何でしょうか。 その日暮しのものは結納金が用意できないので、嫁を の事例を見てみましょう。 とることができないといって泣いている」と記してい ら小袖以外に下着 結納がすむと婚礼です。 婚礼祝儀帳」によると、中期には鯛、たい 結納にお金がかかるようになってきたのです。 緋縮緬、黒繻子が加えられてきた天保初めころ(一八三〇年代)か 婚礼に呼ばれた人が持つ 後期になると白綸子などの 江戸中期から後期に 黒繻子が加えられてきた。 松本藩大庄屋中田 鰤などの かけ 食 家 1





三ノ膳











大平 ik

椎

長

ゆりかん 小串大魚 やき鯛 羊かん 大半へん

7

です。

現

t

江

F

時

代

0)

慣習がこのような形

7

残

(小野和英

ています。

11

3

役

つとふ 茸 さんなんきんこ

+ 盛 あらめ鯉 セラかく 岩たけ

ては

鉄

合

カ

あ

人

きくらけ つまミ 青

6 2 むすび動

主なし

や

庄屋の家を中

10

1=

豪華

な婚

礼

がおこなわ

れ

まし

よう

江

戸

後

期

1=

なる

婚

礼

ŧ

派

手

n

名な

六筋

0

ほ

n

ます。

簞 は

一等す

7

0

輿 1=

入となり

して

持参した衣装

類

絹

織

中

1=

O

带

たん

長持ちち

櫃な心

を二

ず

持

参

坂

井家の

F

わ

かい

八三六年

天

保

t

1=

婚

礼

道

具

ようかん

みかんなどが盛り付

it

5

和

ま

した。

百

生成り n

あ

5

S

鯉

栗り

岩茸な

蓮れんこん

. 艫がき

.

.

すなど、

折

は

焼

¥

ま

大平がおから



三三九度の盃(長野県立歴史館蔵)

品

物

か

增

えて

11

垣は級科なお

しもとぐらじゅく

郡

F

倉宿

戸

倉

むい

0

坂

井

家

7

年

文政

おこ

なわ

た婿

入婚ん

豪ご

華か

膳

性がそ

1820年(文政3)坂井家の婚礼の祝い膳

(戸倉町坂井家文書より復原制作 長野県立歴史館蔵)

以 中 外 南 信

現代に残る慣習 方では、 披露 宴 0 上

漿 割 鉄漿 n ます。 鉄か地漿な方 をも 親 親 かい ち は新 結 親 婚 鉄 親戚筋 または、 漿 た証がし 親 0 代 羽はの 人 根報壇 て新婦 かい わ お歯は なる ŋ 黒な 0 一に新郎新 7 歯 0 11 ことで、 が多 う を黒く染 相 談 人 かい か、 1= 0 11 婦ぶ たよ 3 3 か、 8 場 走 0 仲

15

角行灯



瓦燈



灯台

(4点とも武石村ともしび博物館蔵)

◆信濃国の灯油

◆暮らしに生きたともしび

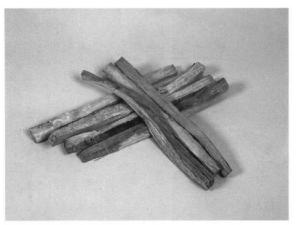
夜の世界がひろがった

照明文化のはじまり

を絞った灯油や、ウルシやハゼの実を原料とした蠟 増えました。 までの庶民は、囲炉裏の火や松の根などを燃やして夜 する店ができたり、 きました。農家では夜なべ仕事をしたり、夜でも営業 然物をそのまま燃やして明かりとしました。江戸前 の生産もすすみ、夜の庶民の暮らしを大きく変えてい の明かりとしていました。その後しだいに、 のなかで生き続けてきました。最初は木や草などの 火は原始時代からその時代に生きた人びとの暮ら 庶民が書物を読んだりする時間が 植物の油

江戸中期、各地で灯用植物が栽培されて絞られた油

普及し始めました。代表的な灯油には荏胡麻、菜種、は、町場の庶民を中心に灯油として人びとの暮らしに す。 井郡を主産地とした善光寺平(長野盆地)で菜種の栽 綿の実、 信濃国では長い間荏胡麻が作られていましたが、高 ハシバミ、ツバキなどから絞った油がありま



ひで鉢の上で燃やして明かりとした松の根。



江戸時代以前から使われたひで鉢 (復原制作 長野県立歴史館蔵)



た。

行

灯や提燈には

使

みちや

地域によっ

ていろ

3

な形

かい

ありました。

火具

は提燈、

燭台、

手燭、

がん灯

などがあり

行灯が 灯火具

灯台だい

短点なんけ

瓦燈などがあり、

蠟燭

を使っ

た灯

灯油を使う代表的なものには

が生まれ

灯

油が庶民の暮らしに普及するとともに

いろいろな灯火具

まで運ば

れてい

ま

囲炉裏の火も明かりのひとつだ

った。(長野県立歴史館常設展示)

培が宝

暦

期

七五一一一六四

年

以降急速に

ひろ

倉賀野港

(高崎市)

から利根

11]

江

戸川

の舟運で、

江

で鳥居峠を越えて上野国

群

馬

崎

さら

とりいこうがおって栽培されて絞ら

ń

た菜種油

大なざさ

であっ 記され まし 定 ŧ 九 たが 燈を用いたくらい ぱら油を使 中 年 燭を使った灯 たことがわかります。 寛政三)、 ます。 蠟燭は倹約して使うこと。 当時は蠟燭 った灯火具のほうが普及 火具 このことから当時は、 安曇郡中台 は は 江 信濃でも室内 戸 島 後 庶民の多く 村 価 期 なものでした。 池 出 田 回るように してい 蠟燭 町 0 は 照明 夜 間 か う 0 貴 項 倹 ました。 約 は 重 目 外 n か 村 七 出

木綿時代のはじまり



麻衣料を織った麻の繊維。写真 は大麻。(長野県立歴史館蔵)



れ

朝鮮

極

的 といきゅう

Z

0

太物(綿織物など)を売る店(『諸国道中商人鑑』 長野県立歴史館蔵)

1=

ち弓で取り に種子や不 かな繊維 木約ん 木綿とは

くらんで六~七週 木綿はアオイ科の繊維作物で、 織られ (cotton) があ たも のぞきます。 純 د ز۔ 物 0 かい れ とは綿花 ます。 間 0 が綿織物です。 で皮が 7 これが綿花です。 糸車を使っ 11 ますので、 破 綿めん れ、 糸 花が落ちると子房がふ 中 て綿糸に紡ぎ、 綿 から白 織 繰 然り綿巻 花され 物 0 くてや 総 称 は 繊 わ 維 b 打

れまし IJ ました。 木綿栽培がひろがります。 綿織物は室町時代に、 か、 などに 水内両 鉄 ひろ 砲 中 当時、 の火縄や陣幕などの軍需用としてでなれ、ビグまくでなどが、一人ではれ、上層階級に時、唐木綿と呼ばれ、上層階級 郡 世に か なると近畿

東海

瀬せ

F

内

方

利

用

0

衣

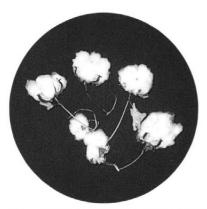
料

尾おで 流域 高 井 信濃国で木綿 られ、 愛知県) 市で売買されまし ・三河かかか がります。 の栽培がひろ うら更級 (同) 植たしな ·越中 これら がる 郡 の木綿 0 富山県) は か、 江 中馬 は 17 F 中 町 7 によっ 方面 0 期 家や農家 千ち から 曲は 11]

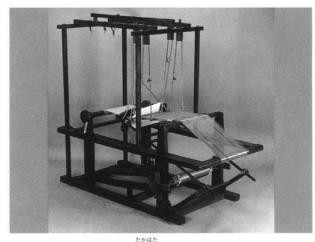




反物の販売風景 (『諸国道中商人鑑』 長野県立歴史館蔵)



衣服の原料として信濃でも作られた綿花。



かく

染色も自在にできます。

ら作

た麻衣料を着てい

た庶民に

も綿織物

かい

広

になり

ました。

木綿は麻に

比べ

てはるか

わら

か

それまで大麻などてはるかに肌にやれ

たい

て 綿

筒湯

卷

11

たも

0

か

大量に移入されるよう

も繰り

実

を

取

ŋ

除

11

た綿

花

•

篠の

巻き

繰綿を弓でた

綿織物や絹織物を織った高機(長野県立歴史館蔵)

れられていきました。

八二七年(文政

に刊行

され

た

『諸国道

中方

商人鑑

をみると、

北国街道ぞい

の多く

の商店では

信濃国の綿織物

太物として木綿を扱

0

ていることがわかります。

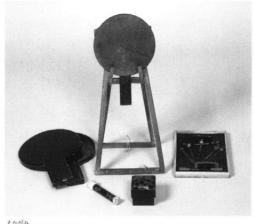
地機でに濃国の 袋でする 天保 後期 ました。 裏に使う んになるまで、 わ ŋ かい で自家用 期 られた信濃 有名です。 なると、 地 幕末の 機に 綿織物として、 の村むらでも綿糸を藍 ハ三〇~ か 0 信濃に 開港で生糸 綿 わ 綿 0 織 綿 織 小 倉織 物業は信濃を代表する産業のひ 四 織 7 物を織るように 高 も京都西 物 四 年 は は 機が普及 江戸でも 帯び (絹糸) 地じ諏 色に は 40 訪 陣 袴地はかまじ 生 知ら 0 か こら高機 産の 小倉織 まし なり を作る製糸業が 染 8 れ る 全盛期を迎え る織物となり まし 織がや 組る 0 地じ松 技 屋 販 売 かい 祈 本 足袋 增 目 かい 江 足た的 え F 伝

小野和英

つだったのです。

中山道贄川宿(楢川村)のお六櫛を売る店先のよ 。店の人が「めいぶつかいなされませ」 旅人に呼びかけている。

(㈱郷土出版社『十返舎一九 信濃紀行集』より。原本は 上越市 高橋孫左衛門蔵)



^{ぇゕがみ} 柄鏡と化粧道具(長野県立歴史館蔵)



水はぎん

や鉛から作りました。

伊勢は

(三重県) で採

n

た

ます。

この

中

青黛

(眉を剃

0 0

たあと、

眉

せいたい

80

0

顔料 に白粉

が多く

記

Z

れ

7

ます。

白

粉

は

村

佐久市)

の箕輪

家

売っ

た化粧品

類

記

録

か

あ

n

らです。

ハニミ

四

年

(文政六

5 戸

Ĺ

佐

久

郡

中

化はま 化粧

がー

般の庶民に広がる

0

は

江

時

代

7

か、

紅やお歯黒道具が入った化粧箱 (財日本民俗資料館蔵)

水

銀

を粉に

L

て商

品

したもの

かい

伊

勢お 勢参

しろ

11

2

呼ば

れ

た白

粉

です。

江

F

中

以

降

0

伊

ŋ

0

流

行と

紅

0

原料で

(ある紅花)

0

生

産

かい

出で

羽和 ŋ

玉

山

もに

いお土産と

て全国

U 期

3

かい

まし

鉄漿付の広がり

を中心に化粧がおこな

われたのです。

が増え、

盆や正

月、

村祭り、

節さ ŧ

句〈 化

婚礼れい

晴

れ

日

で盛んになり、

上方や

江

F

0

商

などを通

ľ 形

流

通

しま

このように庶民

0

間

粧品を手に

する

機

会

類ねつけ ことも 結婚と同 と呼びます。 ひろがりました。 時に歯を黒く染め、 鉄片を数か月、 歯を黒く染めることを、 出 産を契機 酒または酢など に眉を 剃 鉄かる



庶民の女

化粧する百姓



両歯がついたお六櫛。百本ほどの櫛 目がつけられている。(長野県立歴史館蔵)





中山道奈良井宿(楢川村)のお六櫛を売る店先のようす。 (「木曽街道六十九次」部分 長野県立歴史館蔵

木祖村)

があ

げら

れ

筑摩郡奈良井村

楢

11]

村

藪原

村

う本には、

信濃国

の名物として

七五三年

宝暦三)

かい

れ

『千曲之真砂』

山道

が通っていた木曽地方では

「お六櫛」

2

う

櫛

かい

髪をすく櫛も

江戸

時代には

大量に作られ

中

木曽のお六櫛

中

17

て置

<

と褐色の放香する液体ができます。

お歯黒

で歯

に塗りました。

江

戸

時代、

信濃国の農家

黒の

道

具

がひろく普及しました。

江戸で使わ

た櫛

0

割は木曽で作られたとも言い

旅人の手軽なお土産として買い求められました。

でたくさん作られていると書かれています。

ています。

す。 が中 衆 から降ったとして民衆が狂 慶応三 0 騒乱 部 村芝居の時だけでなく、 八六七年 (慶応三) 圏を中心におこりました。 白粉を塗って女装 が発生しまし 田 に豊川稲荷 から翌年に 鹿塩村(社のお 乱する 男もこのような場合に 乱舞したと記 札 信濃でも一八六七年 「ええじゃない 大鹿村 が降っ けて、 おれだれ して 0 源蔵は、 かい 11 カド 天 ま

粧をするとい

う

のは興味深いことです。

今につながる年中行事



飾り、

男の子の成長を願う行事となり、

粽や柏餅を食べるようになります。

七月七

日

型がみられます。

受う行事となり、武者人形・兜などをたとえば五月五日の端午の節句が、たとえば五月五日の端午の節句が、サウベル は、江戸時代に原

今につながる年中行事のい

の七夕には、

願い事を書いた五色の短冊を笹竹に飾る

一一月一五日は子供の成長祝

11

2

晴れ着をまとって神社に詣

習慣が広がります。

しておこなう七五三で、

江戸後期から明治にかけてひろく販売された古今雛。現代の雛人形に比べて大きい。 (長野県立歴史館蔵)

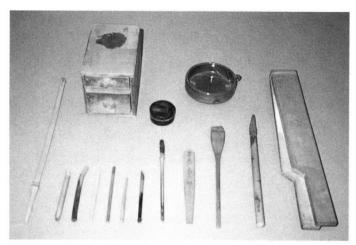
ることが広がります。

年中行事とは

事が、 て取り入れられました。 ツがあるものが多く、 毎年決まった日に伝統的に繰り返しおこなわ 年中行事です。 中国や朝鮮、 日本では古代に宮中行事と 東 南アジアに れる行 ル

難祭りの歴史 中国から日本に伝来した雛祭りは、

三日 江戸でも雛祭りが盛んになり、 上に二、 江 F の節句として定着しました。 初期までは、 三対並べる程度でしたが、 紙でつくられた雛を赤 布製で公家の正装姿をが、か、中期以降になると 江 戸時代に三 11 毛せん 0



押絵の製作に使った道具類







に1840年(天保11)の銘がある。

1=

普及

してい

0 た難

人形

は

現在

では古今難

とよ

ば

n

7

る難です。

明

和

年

間

t

六

四

5

七二年)

江

F

人形師原舟月が彫つにんぎょうしはらしゅうげつ

た難

人

形

かい

江

戸で流行しま

L

「裏雛が飾られるようになりました。

江

戸

0

庶

民

たただい

押絵の下絵(このページ3点とも)則日本民俗資料館蔵)

現

代の

内裏雛

はこ

0

流

n

をくみます。

信濃国の雛人形

信濃国には江戸中

期

京

都

や名古屋、

江

F

か

いら中馬

2

運送業者の手で入ってきました。

おもに

大名家

0

0

女じょ 貼はり 時代にできあがったのです。 庶民 雛を押絵でつくるようになり 0 くり 飾るようになります。 庶民には高 や 名主 ŋ を題 は中野でつくられた土雛(土で作られては高価な内裏雛は手に入りません。 地 はじめました。 あわせたきれ細 松本では下級武士たちが内で ように私たちにとっ に押絵が売られ これを布で包んで中に綿を入れ 材とした押絵が多かっ 庄屋などの豪農 押絵とは 工です。 また、 ていきました。 商が購入しました。 て馴な その後幕末に ました。 人物 天保期以 (土で作られた人形 染み たのが 職は 0 各部 0 深 降 当 一初、 立 分を厚紙 11 幕末ごろ 体的 北信地 行 か 傾はない 17 押だし ハ三〇 事 小野和英 7 は 絵え 信 を 般 内 方 江

遊り濃

切

年

を

F

老後の生活をどうしたか

◆親孝行でほうび

井郡小見村 孝行などの善行が認められて、 府領・大名領を問わず、 村百姓十兵衛の女房はなは、姑(夫の母親 者などの人名やその善行の内容を調べさせ ます。 一〇枚をもらい、 信濃にも多くの孝行話が記録として残って また、 子孫まで苗字を名のることを許されまし 戸幕府は、寛政の改革の一環として、幕 一七八〇年 (安永九)、 という本を出版しました。 一八二六年(文政九)、同じ小見 (木島平村) 百姓太右衛門は、 その身一代刀を差すこと 全国の孝行者・忠義 ほうびとして 幕府領 0 親 高



「四季耕作図屛風」 長野県立歴史館蔵) (部分

(栄

があったのですね。 今日でいう高齢者への福祉手当のようなも して一日五合ずつの米をもらいました。 とると自分の子どもたちに なくてはなりませんでした。 のような例はごくまれで、 ほうびにしても、 の孝行をほめられ、 しかし、 孝養費の支給にしても、 銀五枚と姑の孝養 多くの場合、 面倒をみてもらわ 太右衛門やはな 年を 費と

◆親子間の契約

譲って、 もに りました。 主 うのです。もちろん、 活を自分で守るために、 当然とされていました。 にとっては、 地 のままにしておくことがありました。 江戸時代には、 のことを隠居免 の地位や財産などをあとつぎの子どもに 八〇一年(享和元)、高井郡箕作村 相続せずに、 自らは引退する隠居という制度があ 生きているうちに相続をしてしま 隠居後の親の面倒を見ることは 一定面積の土地を自 年をとると家長(一家の (面)とい 家長を相続した子ども すべての土地を子ど しかし、 いました。 隠居後の生 分所有 0 土

> た書類では、 かせています。 かい 死んだ後に継母へ隠居免を渡すよう申し の百姓三左衛門は、 近隣の村々の親類を証人に 息子に対して、 白 聞 分

だ後はその田地は本家に戻すこと ずつ、隠居免として渡し、 そこからとれる白米三斗五升の俵を一二俵 野菜小畑二枚、 田 地稲五〇〇苅、 これも死後は本家に戻す ただし本家で管理 もし継母が死ん

などは必要な分だけ用意すること 大豆三斗・味噌 塩 茶 油 新き 焼 炭

こと

金子五〇両を渡すこと

n 代 めごとを前もって文書で決めておく、 りました。 親の面倒は子どもたちで均等にみるように 義務づけられていました。しかし、今日では 倒はあとつぎの子どもがみるように、 と定めていました。 ませんね の人々の知恵が必要になっているのかもし 第二次世界大戦前までは、 今のような時代には、 年老いた親の 家族間 法律で 江 F 0 時 面





A Windows to the state of the s

祭礼の日は村できめた遊び日だった。 (「雨宮村神事踊図」大正時代に原画を写したもの 長野県立歴史館蔵)

を食べられる楽しい日でした。

また、

五月の野

休

2

(農休み)は、

田植えから解放された労働休養日と

大人も、

村をあげてその日を待ちこがれていました。

て昭和後期まで残されています。

遊び日

は

子どもも

村の遊び日

もっと休みを

村で決めた村の休日

が遊び め らには学び 権現祭り、 放された、骨体めの日でもあったということでしょう。 では、 はだれもが認めた百姓らの遊ぶ日であり、 遊び日とした日は、 休み日」と呼んで定例の休日としています。 その ハニハ年(文政一一)松本領成相新田町村 江 ました。 戸時代の信濃国では、 家族の健康を祈る七草粥、ななくきがゆ 日 日の 表のように遊び日を年間二八日と決めています。 は、 安曇郡あげての祭である穂高明 、御神酒のほか季節にあわせた草餅や大部分をしめていました。 地域によって違いますが、「遊び の祈りを捧げた天満宮祭り…など、 年の始めを祝う正月三が日をは どの村でも村の 火伏せの神に祈 労働から 休日 神祭り 豊科町 る秋葉 日 その 「を決 祭礼 赤 飯 日 to 8





伊那谷でさかんだった操り人形のひとつ黒田人形。 遊び日の増加は庶民の娯楽の世界を広げた。 (長野県立歴史館蔵)

月	遊び日	行事や食事など
正	1 . 2 . 3	元日
	(三が日)	毎朝雑煮、毎夕蕎麦や麦麺類
	4 . 5 . 6	
	7	早朝、七草粥。年神・門松を供える
	15	神棚しめ松送り・門松送り
	16 · 20	
2	1	
	8 (午後)	八王子宮疱瘡祭り。昼過ぎ遊。夜ぼた餅祝。
	18	秋葉権現祭り (火事祭り)。天明年中の火災以来。
3	3	節句。雑飾り・草餅。
	10	金比羅大権現祭り。寛政の火災以来。
5	5	節句
	野休み2日	田植がすんだ後、餅つき。
6	16	3.# fal.* 産土社神明宮祭礼
7	7	七夕祭り。竹に短冊祝。さとう餅。
	14・15 (盆)	2 18
	16	早朝蕎麦、仏前供え。夜送り火。
	24	戸隠大権現祭り。
	27	穂高明神祭り。郡祭り。
8	1	だいごんげん きかな
	18	秋葉大権現祭り。酒・肴用意。寛政六年以来。
	25 (午後)	天満宮祭り。昼過ぎ遊。町中より餅米寄せ、赤飯
		並びに酒。寛政六年以来。
9	21	先祖祭り。藤森同姓祝遊。
計	28 E	日間

成相新田町村の遊び日。天明期や寛政期に始まった祭りもみら れる。(古川貞雄『村の遊び日』による)

領

高

井郡

井上

村

須坂市)

では、

若者組

定

例

休

ようになり

ました。

一八三四年

(天保五)

幕

府

日

五

件

の遊び日願

いを村役

人に

提

出

新

のほびほ

百十かに

日か

や祭礼後始末など一二件

0

遊

U

日

かい

認

8

作と

飢き

饉

0

後

ということで大変なときでしたが、

かい

增

えて

ます。

よう

江

戸

時

代

0

休

日

は

白

姓

0

生活

40

村

0)

5

れ

実施さ

ました。

村にとっては、

前年の深刻

凶

月、 か、 者組 年 11 つくら ま各地にみられる祭りの多くは、 なお、 中 てい 三年 明治政府 せ それでも年に五一 行 祭り 事に れてきたものです。 11 欧米風 たのです。 (文化一〇)、 採 あ づくり 0 用 わせて、 手によってです。 0 n 土曜半日休と日 0 た 高井郡桜沢 情熱 日もの 村 遊び日を減らそうとしました は かい か、 決 遊び日を決めています。 8 村 休 t 曜 日 この 中 を増やす原動 休 野市) 年 日 時代のなかで 0 明 制 とり では、 治 度 か全 九 力 17 玉 29

世紀の前半に

決

8

5

和

た定例

0)

游

U

日

は

年間

二〇数

日

0

村

が多かっ

たのですが

世

紀

後

1=

いなると若者の

若者組

0

願

11

が祭日を増

4

遊び

日

27

サラリーマンになった武士たち

石高	人数
~1200	2
~ 500	2
~ 300	8
~ 200	22
~ 140	11
~ 100	23
~ 70	20
~ 50	16
~ 30	12
合計	116

安政年間の高島藩士(給人) の石高別人数 (今井広亀『諏訪高島城』より作成)

サラリーマンになったのです。

武士たちは、

藩から給料をもらって城下町で暮らす

、す。また甲斐国 (山梨県) の鰍沢た藩士にとっても土地の支配は面

領内の米を江戸に送ってお金に

換



諏訪湖のほとりの高島城。 絵図の手 ている。(「諏州城図」部分

諏訪の高島藩では地方知行を廃止

ます。

六

七五

町に

集め

b

れ

ま

ていまし

かわりに俸禄

おかりまい

領民

0

統一的な救

な救済

前年の凶

作で諏訪

に

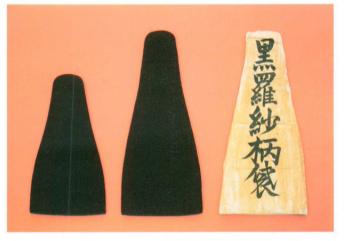
えるルートが整ったことも改革の契機となりました。 たが、 に藩の米蔵ができ、 倒な面があったのです。 が必要になったのがきっかけでした。 このようなやり 士らの土地を藩に返させ、 二〇〇人もの餓死者がでて、 江 俸禄を得て暮らす武士たち 地方知行は藩主が領内を直接支配するには不都合で 延宝三 戸時代のはじめ武士たちは城 を与えることにしました。 らうなやりかたを地方知行といいます年貢を得る土地は各自が農村に持っ 城下町にい

取り 役人としての武士

藩士の間にも藩主にお目見えが許された給 から、 お目見えが許されない足軽 ・中間 手明な 石



村を訪れた武士たち(「四季耕作図屛風」部分 長野県立歴史館蔵)



代官

給人としては下級の

五〇石くら

11

の藩士

カジ

な

0

7

11

ます。

立てには代官・手代があたっ

てい

ました。

安政

年

間

0

まざまな行政課題を扱

ってい

ました。

また年貢

0

取

n



藩政にかんするさまざまな文書のなかで印鑑も使わ れた。高島藩士の吉田家で使われた印鑑。

(長野県立歴史館蔵)

刀は武士の魂とされたが、平和が続いた江戸時代には、 戦いのために抜かれることはほとんどなかった。吉田家

に伝わった柄袋(柄のカバー)。(長野県立歴史館蔵)

0

石でした。

彼

5 た

は

石

高

や身分に応じた役職に

0

11

1

仕事を

11

した。

多

11

俸禄を得て

11

0

は

務

た千

野の 7

家

0

五

四一六〇年)

の高

島藩

0

六 8

人

最

t

ちの

家老をする

どまでさまざまな身

分がありま

した。

安政

年

間 5

発さ

出稼ぎ

宗

門 7

訴訟 そしょう

不

IE

0

締まり

.

道

橋

普請ん

I

しゅうもん

か

11

0

は 取り

郡お

方

御

役

所

開かい

川かわよけ

(水害防止)

など、

領地と領民

1=

関する

×

領

変 来る 火 年 0 0) 主 か 事 見 貢 上 と名主ら 5 7 年 0) 0 田 てい 藩領 処理 調 間 俸 出迎えました。 n 7 禄をもらって領 查 0 ったのです。 0) どが 0 IJ 藩 かい 小ちい 県郡 中 8 の役 か、 目的でした。 1= 10 の来村もありました。 になって、 山 人の来村が 武符 合戦に備えて生きた武士が 林、 石し 内 村では 家屋、 0 行 村でおきた傷 三度の食事などご 政を担当する役人へ ーハ六二年(文久二) 水車 八回にのぼります 小 屋、 村では た傷害い 炭焼場 橋詰文彦 潘士 事 馳ち 件 走る か 所 to



彗量をしめしたもの。 (長野県立歴史館常設展示)



糖尾村五人組帳。名主ら村役人はじつ にさまざまな文書とかかわった。 (佐久市 重田祐一蔵)

無筆を理由に名主を辞退

名主ななり

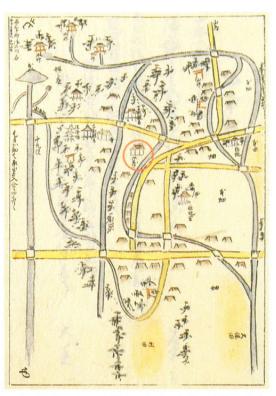
出ています。なぜこんなことになったのでしょう できませんので、 善兵衛は、「私は文字が書けず、 文字が書けないこと)を理由に名主役の辞退を申 七〇七年(宝永四) 名主を辞退させてください」 佐久郡糠尾村 お役所へ文書を提 (佐久市) と無筆がかっ

文書による支配と文書量の増加

算用帳、 0 なりました。 なわれるようになると、 面 年貢の納入についてみても、 江戸時代になって徳川政権による統一 積 対して文書による統一的な命令伝達を行うように や生産高を記載 年貢勘定目録 大名たちは、 た土地台帳)、 検地帳や名寄帳けんちちょうなよせ 新 年貢割付帳や 的 支配 11 領 がおこ 地 0 田 畑

う されるようになりました。 たくさんの帳面や記録を必要としたのです。 しの契約も文書によってそれぞれの権利を保証 これ以外に ごとの訴えや t 触書や、 和談ん 仲 各種の証文がだされたほ なおり)なども文書でかわ 田 畑 の売買証文など村民ど しあ

(年貢納入が済んだ記録)



○印が御蔵。瀬沢村(富士見町)の御蔵は米蔵と文書 蔵をかねていた。

書館といえます。

文書を調べて権利を守ったのです。

11

わば村立の文

事

件がおきると蔵

という意識でこ

(「諏訪藩主御手元絵図」 長野県立歴史館蔵)



机村(富士見町)の郷蔵。江戸時代に建てられたも ので、文書も保管された。

の書き付けにても千金にかえがたく」管のための郷蔵を建てました。村人た でてきました。そこで、新しく文書保管庫 (富士見町)では、年貢米を納める御蔵ってきました。一八一三年 (文化一○)、 蔵を建て、 村にあった文書館 村の文書量がふえ、文書保管用の土蔵 文書を大切に保管 郷蔵

諏訪郡乙事り おうこと

村

か

ない

名

村人たちは

0

「半紙一行」というぎょう 隣に文書

三つ 中野 九世紀中期には五〇〇点と二八倍程に増加しています。 期の文書量は一八点であったものが、二〇〇年後 字が書け うことが多くなり、 こうして村役人の作る文書が急速に増えたため、 市域 0 時 期 の村むらにのこされていた文書一万点による な 0 11 村役人では務まらなくなったのです。 年平均の文書量をみると、 文書量が増加しました。 一七世紀

中

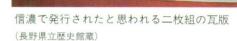
現

文

メディアのはじ 新聞のルーツ

むりいがさあるるせ みち

善光寺地震のときに出されたナマズ絵 (長野県立歴史館蔵)



もに、

瓦版は情報を伝達する

ス・

メデ

1

P

の役割

の情報

江戸

や名

古屋へ

屋へも持ち運ばれました。旅人の口伝ての信濃国で発行された善光寺地震の瓦版は、

果たしたのです。

信以外於

災害と瓦版

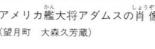
一節です。 害が 江 7 西己 事件が起こったときに、 た読み物で、 報をすばやく伝える、 られるように、 .戸で発行されたナマズ絵とよばれる印刷物 のようすをくわしく知らせた瓦版も発行さ節です。このときは、ナマズ絵のほかに、地 八四七年 「たいへんだ!阿弥陀に地震 ました。 瓦版は、 弘 町の中で売り歩かれました。 枚あるいは数枚つづり 化 四 瓦版は地震につい 災害速報としての役割をになっ におきた善光寺地震のときに、 ち早く新聞の号外が街頭で んが叱られ ての客 の紙に印 客観的な情 今日大きな 0 地震の これ 一刷され れま なか 被ひの

異国船情報

の好奇心をあおる珍しない。 地震などの自然災害の 11 話や、 涙をさそう孝行話など IJ か、 読 む人







た。

が絵や文字に書かれて、

の絵が残されています。

遠く横浜でおこったできごと

いち早く信濃まで伝わりまし



関するものも、

発行者名を記さずに出されるように

禁止されていた政治

でした。しかし幕末になると、

文字情報の庶民化

本陣の大森家には、ペリーとともに来航したアダムス版が数多く発行されました。佐久郡望月 宿(望月町)版が数多く発行されました。佐久郡望月 宿(望月町)

賀に来航したときには、アガーハ五三年(嘉永六)、

黒船や海岸防備に

ての瓦

アメリカのペ

1)

艦隊

かい

浦言

経済の進展によって人や物がさかんに移動し、 りの数の人々が文字を読むことができました。 江戸後期には、 寺子屋の普及によって農村でもかなてらこや、よきゅう 学問 商品品 0

発達にともなって知識の交流がおこなわれ、

文

字情報が庶民にまで広がっていきました。 長野新報」 八七三年(明治六) しかし、 が創刊され、 には、 瓦版 版の娯楽的な部へ 正したいに 「信濃每日新聞」

に姿を消

0 前

館林弘毅

分は今日

の新聞

にも残されています。

安全な暮らしへのそなえ ―町や村の火消し

1847年(弘化4)の善光寺地震の時におきた火災のありさま。 (「地震後世俗語之種」 真田宝物館蔵)

火消しのはじまり

とが基本でした。『江戸丁々火用心道具品数附』 消火にあたり、 火消しは江戸時代になってから各都市につくら 武家屋敷で火災が発生した場合は大名や旗本が 町屋の火災には町人が消火にあたるこ ま

印がわかります。はしご、竜吐水、

水桶、

つるべなど

を

が数量とともに記されています。それだけ江戸の

との防災に対する意識は高かったといえます。

上田城下では当時藩主であった仙石政俊が消防用

0

みると江戸の町ごとに常備されていた火消し道具や目

け持ち場所が一目でわかるように纏や高張 提 燈にそ がなされました。 て分かれていました。大きな火災でも現場で自分の受 水篭を一六六八年(寛文八)に常備させたとい ハ)には飯田藩領でも出火のさいの定書がつくられ 人足の組織と道具が整えられ、 こうしてつくられた火消しは、 また一七二六年(享保一一)松本町にも町火消 同じころ小諸や高遠、 飯山でも町火消し 町ごとに 一七三三年(享保 組 の整 とし 和 備 ま



(「江戸丁々火用心道具品数附」部分 長野県立歴史館蔵)



水篭 (上田市立博物館蔵)



よう。

当時は消防車も化学薬品の

消火剤もありません。

火を

火

火を消すための道具にはどんなものがあったのでし

いろいろな火消し道具

火事羽織 (上田市立博物館蔵)

寄せ付けないように大きな団扇であおいだりする消水をかけたり、類焼を防ぐために家を壊したり、火

活動

般的でした。

後にはポンプの役割をする竜吐水や水弾が にかかせない道具でした。 た火の粉をたたいて消した藁 箒やむしろなども消 塗った水篭を使いました。 水をかける道具は篭に和紙をはってその上に 家を壊すために斧や鳶口を使ったり、 その他木製の水桶 飛び散 使 坂部詠章 わ 長な柿 柄杓、 n ま 火 を

にあたりました。 ぞれの組の名や記号を書き、 これ を目印に 消 火

れ



蘭方薬として宣伝されたウルユスという痰 などの薬の看板。文政年間には信濃にもは いっていた。

も広がっていました。

八六一年

(文久元)、

それまで無医

村

だ

つ

た

諏す

訪ゎ

あ

ŋ

ました。

医薬

0

関心と需要が、

医師

以

外

0

郡

横

村

(茅野市)

では、

村で居住費などの生活費

矢

師

0

村方引請」

2

11

いますが、

江

戶後期

1=

は

無

山浦通碩と

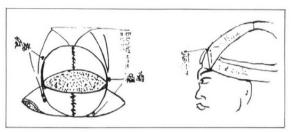
う医者を迎えています。

n

を



1861年(文久元)に「無医村につき」山浦通碩という医者を 招きたいという横内村役人たちの願書 (茅野市 横内共有文書)



宮原良碩が記録したシーボルトの治療記録 (天理大学附属天理図書館蔵)

療法でした。

ると神仏に祈

までは、

村のなか

病気に

な 期

江

F

初

たの

が主な治

3

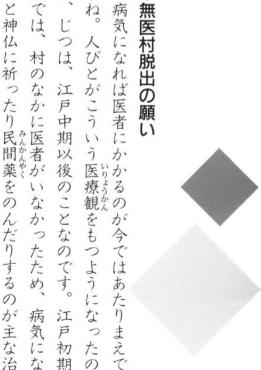
な

医

は

三

薬種やくしゅ 医者による投薬と治療を求めるようになりました。 かい 八一三年(文化一 0 少 江 得意先が医師を中 F ずつ増 中 薬の原料 期 以 後、 加 L 0 ŧ 商品 その効果がみえてくると、 出まわるようになりました。 には、 10 流 1= 通 武士、 が盛んに 北信地方の薬 寺院など六六二 なり、 種問 11 3 屋 人々 11



すね。

は、

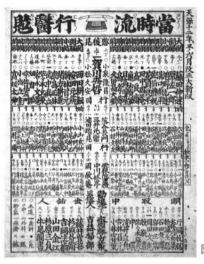
じつは、

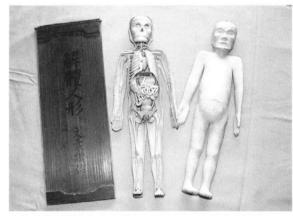
江戸

36



小諸藩の種痘を実施した川口自仙・林甫三らが藩主牧野康哉公の徳をたたえて奉納した額 (小諸市 徽古館蔵)





小林文素が製作した解体人形 (臼田町 小林改一郎蔵)

きました。

一七七四年

(安永三)

0)

杉田

玄白らの

医学ではなくオランダ伝来の蘭方医学を学ぶ者もでて

体新書』

0

刊行がそのきっかけになりました。

医村

脱

出

0

願

はどの村でも強くなっ

てい

たのです。

村のなかの西洋医学と近代

医者への需要がたかまってくると、

それ

までの

漢方

医者の番付である『当時流行医見立』(長野県立歴史館蔵)

院 に近 級な 始 立 見て蘭方医学を学び、 なると、 う名で医者になってい 11 んで人体模型である解 臼田町) カリエス) まったのです。 郡 と医学校と医師 ました。 上山 ました。 八二六年 11 五六年 御影陣屋 六九年 伊 田 の寺子屋師匠小林文素は、 那 彼 村 の外科手術をおこなってい(安政三)に下大島村(伊 このように医学の 郡 は長崎でシー (文政九) (上山 西 明治二)、 (幕府 町村 会とをか 田 ます。 領 体人形を製作 帰ってきてから宮原良 町 に、 伊 におかれ 蘭方医金沢宗伯 が那市) ね ボルトとい の宮原浜重と た施設 同じ頃、 長崎に修業に 近 代 た役所) 0 化 7 しま 蘭方医須 『解体新 伊 は ある う医者の手術 佐久郡大奈良 ます。 那 江 に 市 た。 医 5 7 F 你良碩 書』 学館 は、 う農民 田 時 田経哲 か て 幕末 17 今 を をよ 2 た更き 0 か 小、 設 諸 は を b 病 村 疽を 11 かい

自立をはじめた女たち



恋愛結婚や協議離婚

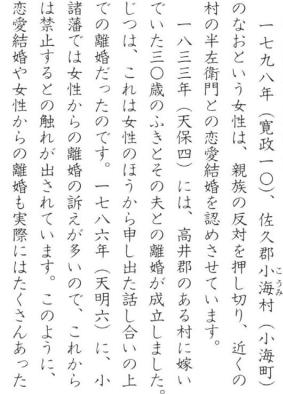
四季農耕図絵」 山ノ内町



離縁状(山ノ内町 青木源蔵)

男尊女卑

といわれてきました。いわゆる男尊女卑というわけ離縁があたりまえというのが江戸時代の女性のあり と説き三 従の教えこそが江戸時代の女性の生き方で は親に従え、 あるとされました。家同士の結婚、 江戸中期の女子教育書『女大学』では、 はたしてそれがすべてだったでしょうか。 嫁しては夫に従え、老いては子に従え、 夫からの一方的な 家にあって あり方



上 小、

0



の実現のために活躍した松尾多勢子 (豊丘村 松尾佑三蔵)





観音寺にある小沢重喬・川上静子夫妻の慕石

のです。

たたかい、学び、自立する女性たち

新の舎り が足多勢子は、国当 が足多勢子は、国当 がよります。 世 郡贄川宿 国学(古典研究の学問) のあいまに、 を学んでいました。 の奥様たちは、 加して、とうとうその命令を撤回させました。 三〇〇〇人にまじって女性たち八〇人ほどが一揆に ようにとの新しい税が課されました。 らじ二足ずつ、女は一カ月に木綿の布一反を差し出 ハニニ年(文政五)に高遠藩領では、 の陰の力となって働いています。 江戸時代の農村女性は働き者でした。厳しい 奥様たちは、グループで大原幽学といーハ三一年(天保二)、上田原町(上 楢 機織りなどをしていました。ところが 11] 村 国学を学んで五二歳で上京し ります。伊那郡供野村 ・ 就名でなく夫婦別姓 には、国学者小沢重奪 幕末になると江戸後期に広がっ を学ぶ女性もいました。 国学者小沢重喬と妻川 江戸時代の後 (上田市) 怒った農民たち 男は 姓でそれ う先生に (豊丘村 日に 明治 0 上鉄摩また ぞ 商 維いの

家

る女性たちが大勢でてきました。

このように自分の人生を豊かに生きようとす

n

農業の技術革新

品種年次	奥州	青早稲	伊勢丸	見出し	三穂	寺白葉	秩父	鹿毛黒	上石	うすは餅	川路	五千石	白福地	ゑり穂	利平次	すおろし	見付	羽々稲	計
延享元年 2 3 4	0000	0000	0000	000	0	0	00	00	0										5 5 6 6
寛延元年 2 3	00						00	00	00	000	0	00	00	00	0				6 8 5
宝曆元年 2 3 4 5 6 7			000					00		000000		00	00	0000000		0	0	0	4 4 4 2 3 4 4

上穂村横厩家における栽培水稲品種 (「駒ヶ根市誌」より) 比較的長期間栽培されたのが、うすは餅とゑり穂であった。

内郡尾崎

村

飯

山市)

の宮本家にも同じような稲の

栽

0

水の

穫量を調べ、

毎年、

培記録が残されています。農民による稲の品種改良

その土地に適した稲作をおこなっていました。

収穫の少ない稲は一年で栽培をやめるな

三種から九種ほどの稲を栽培しては

収い



イネの図 (市岡嶢智 『本草図彙』 飯田市美術博物館蔵)

品種

の改良が熱心にすすめられました。

伊那郡上穂村

駒ヶ根市)

の横厩家に残る一七一

うになった江戸時代には、

たくさん収穫できるような

お米が一番の主食となり、

お金の

かわり

にもなるよ

てきたのです。

年

(正徳元)

から一八五九年

(安政六)

までの稲

0

栽

7

培記録をみると、なんと五○種以上の稲を栽培し

米の品種改良

したお米はその時の消費者の口にあうように改良されどという味の良いお米の名前を知っていますね。こうみなさんは、「コシヒカリ」とか「ササニシキ」な

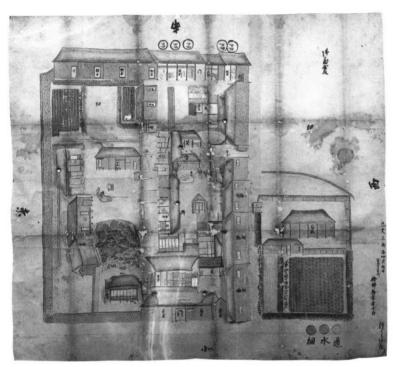
肥料の工夫と雪隠

本格的な工夫は、

江戸時代にはじまりました。

生産をあげるためには、肥料が大事です。江戸時代





豪農屋敷絵図 (須坂市 竹前勝市蔵) 1738年(元文3)の井上村(須坂市)の豪農竹前家の屋敷図。同家では厩肥や 人糞尿を多用していた。南西に肥屋がある。

性

石

灰をまい

て中

和するような工夫も生まれました。

ル

力

1)

な

0



人糞尿は肥料として有効に使われた。 長野県立歴史館常設展示)



肥屋の中に肥桶も描かれ、肥水のためが 7か所もみえる。(「豪農屋敷絵図」部分)

to

敷き藁を腐ら

せた肥料)

などが主でした。

今から三○○年ほど前になると、本家から独立して、

馬を飼えない

彼らは、

家に

.溜めをつくり、そこでくさ

うしてどの家にも溜

なりました。

雪隠は

1

1

レとしてだけでなく

肥

料

欠

塩えか

便所)がつくられるよ

しはじめたのです。

らせた人糞尿を積

極的

個的や雪隠(ほどのおん

夫婦と子供の

小

家族で農業をする家が多くなりました。

芽や若木を水

田

に敷きこむもの)、

以

前

は

木

灰

や川敷

(クヌギ・ナラなど広葉樹

んの

尿ま若

既きゅうひ

(家畜の糞

安などの化学肥料が主に使われていせない窒素肥料なのです。今では空 製造場所でもあったのです。 7 人糞尿に含まれるアンモニアは、 ただ人糞尿だけを使いすぎると、 植 物の 室素肥料なのです。今では硫 生長に よく ありません。 、ます。 そこで、 土地が酸 植 安かりの か、 生 性に 尿素、 長 P 1=

(青木歳幸)

なわれ、

今に伝えられてい

るものも多い

のです。

よう

江

F

時

代

多

<

0

農業

技

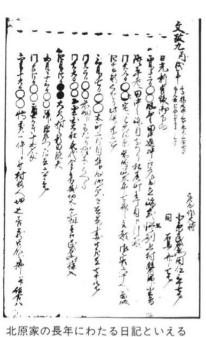
祈

0

改良がおこ

41

気象観測のはじまり



北原家の長年にわたる日記といえる 「当家年代記」。○印が晴れの記録。 (飯田市 北原斌夫蔵)

も生みました。

経

0

積み重ねは、

天気を予測する俚諺

(ことわざ)

そのような

天気の

変化を予想をしていたのでしょう。

11

間

0

観察や言い伝えをもとに、

江

戸時代の人びとは

長



と火打ち金で稲妻をお こす鬼や風をお こす鬼、 雨を降ら どが描かれている。



久保田家の正月の天気の記録(長野県立歴史館蔵)

月四 日 正月四 と思われます。 の記録に記号が使われています。 迎えたのでしょうか。 降昼後天気」などと記されています。 と「元日天気、 0 印が二つあるのは午前と午後に分けて記録したもの ばみられます。たとえば水内郡問御所村毎日の天気の記録は、江戸時代の日記の 伊那郡座光寺村(飯 久保田家の一八五七年 天気の記録と予測 日 がつけられ、 日雪心 大水村、 二日天気、 北原家では明治になるまで同じ形式 天気の記録も続けられています。 · 五月一七日 新田流失」などと記されています。 田市) (安政 三日雪降、

四

正月

の記録をみ

3

(長野市)

なか

1=

しば

四

日昼前少、

の北原家の日記では天気

穏やかな新年を

たとえば「文政三年

⊕」、「文政九年

四

っぽう機器を使った天気の観測 は 八代将軍徳 11] 吉



又十日めく小き度でちへ寄るったを上陽東としてか城すべしとで乾運計 上門魚で見たの其所小飯上があるに安室に陽魚でぬ職て盛く播かりでい 打上陽氣了見支充其所之效光力名と比較事代陽氣を領して最下掃落 三、被八菱室の何毎できて、其前に其中目通り位の高きで、東面了 孔所小的光居力,養大丈夫 七十八八二さらし、むらえの所各八十八夜不養婦たろ以上陽歌八度れ 養蠶

改良がなされ

現在

のように、

気象衛星を使っ

た観

測

ています。

以

後気象観

測

0

技術はさまざまな開

発

ステムが展開されるまでになりました。

(久保田

貞

親

可を得て一八七五年

(明治

ハ)からこ

の乾

湿計を販

売

てねじれる性質を利用したものです。

(メガルカヤ)

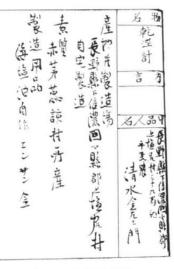
0

穂先が湿気に

よ

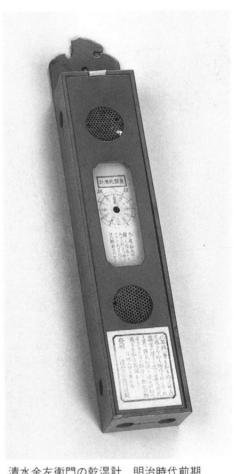
また長野県の

許



乾湿計の解説書(「内国博覧会ニ関スル部」 1877年 長野県立歴史館蔵)





清水金左衛門の乾湿計 明治時代前期 (上田市 清水憲之助蔵)

うな機器を使った観測

は上層の階級でおこなわれた

温

度

気圧

0

順に観測が始まりました。

しかしこ

0

よ

みで、

庶民にはひろ

かい

ŋ

ませんでした。

乾湿計の考案

宗が

七一六年(享保元)

1=

江戸

城内

雨量計を設置

その

後

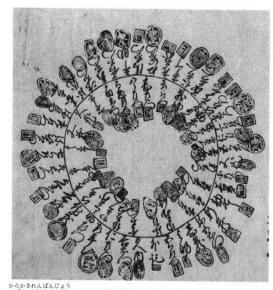
水位を記録させたことから始まりました。

年 上塩尻村(上田市)かからおじり のはじめごろに彼は日本で初めての乾湿計も考案し 成育を左右することがわかってきたのです。 第一の毒なり」 必要性がでてきました。 しました。 信濃では幕末の養蚕の発達にともなって気象観 は これは赤茅 一八四 そのなかで金左衛門は「気のこもりむす 七年 と換気の大切さをのべてい (弘化四) の清水金左衛門(一ハニ三~ 温度や湿度などの調節が蚕 『養蚕 ようさんきょうこうろく ます。 弘録 小さがた 県郡 を著 明 測 主 0

年貢を軽くするために



揆のいでたち。 1825年(文政 でおこった赤蓑騒動での百姓の姿を復原した もの。(長野県立歴史館常設展示)



か村の百姓69人が年貢減免などを訴えた訴状。 代表者がわからぬよう円形に署名した。 原本は中条武吉蔵)

苦しくなった藩の財政

いていたことになります。 出は四万六〇〇両余で、 での松本藩の平均収入は、 一八二五年(文政八)から一八三五年(天保六) 毎年六〇〇〇両近い赤字が 年に三万四七〇〇両 続 支

めさせています。また、豪農商をたよって莫大な借金 ら一八七〇年(明治三)までに三三回もの御用金を納 りしました。飯田藩では、一七二九年(享保一四)か 大商人や大地主、さらには各村にまで御用金をかけた をするようにもなりました。 このように、幕末になってくると、 各藩では、藩士(家臣)に与える給料を減らしたり、 信濃のどの 藩

年貢増税のなかの百姓一揆

りくりが苦しくなってきました。

支出は増えても収入が増えない

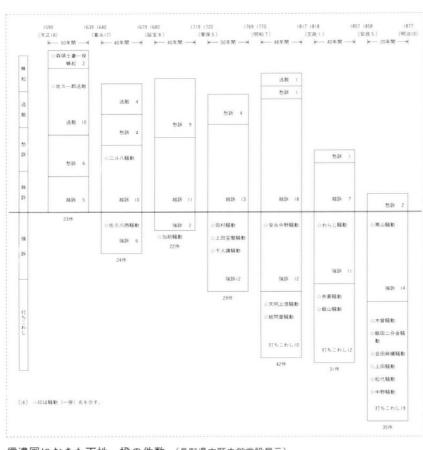
ので、

藩財政

0

松代藩では、 れた田村半右衛門が年貢の一五パーセントを増やして 各藩が最も力をいれたのは、 藩の収入を多くするというやりかたでした。 一七五〇年(寛延三)に浪人から登用さ 百姓の年貢を巧妙に







| 176|年(宝暦||)宝暦騒動の義民の碑 (青木村)



動

田

村

は

命

から

かい

ら、

松

代

か、 終

5

江

F

1=

逃

17

帰

ŋ

ま

揆

五

七

か、

村

か

5

二〇〇〇余

人

0

百

姓

よ

る

增

税

反

11

月

は

山山中

長

野

盆

地

0

西

部

0

山

間

がおこり、

增

税策は

失敗

1=

わ

ŋ

まし

た

田

村

騒 対

した。

納

8

させるなど税

0

収方法を変えよう

百

姓

た

ち

は

相

談

L

增

税をしな

よう

願

11

出

まし

か

度

頼

h

でも藩は受け

れ

n

ま

せ

h

7

信濃国におきた百姓一揆の件数 (長野県立歴史館常設展示)

藩

4

県

土台をぐらつか

せました。

丸山文雄

藩

2

県

と続

17

ざまに

連れんぱん は たが 1= 上 は 7 7 揆 0 近 义 強ぎ 减 世 状が か、 訴そ税 t 信 0 0 < を用 、逃 数 濃 0 ように、 to 始 松 の要求をおこな 代 年 打 国 0 世紀になってくると村や 8 散と呼ばれるやり方で領主 藩 責任者が ちこわ 0 0 て訴状を作成 末 各 1: 天保 地 須 は て しで激 坂 重 わから の凶作 U 11 2 年貢をきら h ば n 0 < 総 h な 理 7 決算 1= 飢饉ん たたかう 1= 中 11 起こ 合 ように 野 ま とも す。 かい わ 地 0 ŋ 7 な あ 域 けるため、金 よう 1= 村 ました。 0 11 0 百 える たー 年 对 百 かい 姓 抗 5 貢 姓 なり 世 九 增 か L 抜 揆 直 ま 世 徴 寸 17 は 紀 傘か ま 結 出

江戸時代の政治改革 潘政改革

藩政改革

(岩崎長思「堀直虎公傳」)

商

田中本家ほか四人の御用達に、

を厳しく取り締まり、

一八〇八年

(文化五)

には豪農

まり

を出して

生活規制や御用達にたよる政治を続けましたが、

金を割り当てくめんさせました。

その後もこのような

藩政

六〇〇〇両近

11 資



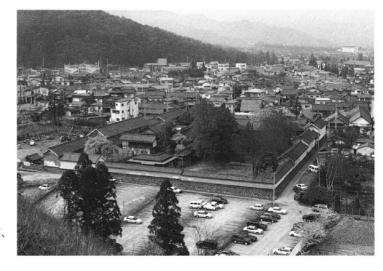
藩の収入増をねらって焼かれた吉向焼 (田中本家博物館蔵)

け重要でした。 を改革して藩政の建て直しをはかったのです。 ら最小の須坂藩まで、それぞれに藩政の改革をおこ の小大名であった須坂藩にとっては藩政改革がとり いました。苦しくなってきた藩 須坂藩の改革 須坂藩では、 江戸時代も後半になると、 貨幣経済にまきこまれた農民の生活 かへs 七九〇年(寛政二)に領内法度(き 信濃では最大の松代藩 の財政をはじめ、 に領内法度 万石 政治 か

参を試作させたりしました。 向父子を江戸から招い 五〇年(嘉永三)六月には、 建て直しの決め手とはなりませんでした。 代藩主堀直武は、 て吉向焼を焼かせたり、 積極的に改革に取り組み、 藩 しかし、 の借財が四 成功せずに 万四〇 薬用人にん



1851年(嘉永4)献金などで須坂藩の改革を支援した中沢弥右衛門に対して 出された褒詞(須坂市 中沢一朗蔵)



両

にも達しました。

倹約と御用金集めに加えて、

同

小右衛門に

頼

須坂藩に御用金をくめんした豪農商、 田中本家(写真提供 田中本家博物館)

江戸城中で自ら命をたってしまいました。

文字通り命がけで政治改革に挑戦したので

九山文雄

ぱつをかい 心学説 教による改革を実施しましたが、九月には、京都本願寺の心学者石田小右: 将軍慶喜の幕府政治のやり方に「諫言」(いさめるこ 年後には、 ٢, 係者三九人を処罰しました。 物を捕えて財産を没収し、切腹を命じるとともに、 れた藩政の改革をすすめました。 わいろ政治がはびこり、 設けたり、 いました。 口 ●命がけの政治改革 源兵衛 十三代藩主となった堀直虎は、 御用金の停止などを実施しました。しかし これまでの藩貸し金の棄捐 河野連が実権を握りました。金貸 幕府の若年寄兼外国惣奉行であった直虎は 土木建設事業を積極的にすすめましたが、 石田は失脚しました。 領民の信用を全く失ってしま 領民には、 苦悶ん 。かわって家老の瞬したが、領民から見 野口 返さなくてよいこ のうちに 河野ら中 一年間の年 し会所を ŧ 関 貢 野 六 乱 反 人

村役人は選挙で

村方騒動がおきた

水利用などは世襲だった名主 や組 戸時代の村では、 頭など村役人を中心におこなってい 年貢納入や行事 (または庄 運 営

民たちとの間に争いがおこっ n なわりふり を村方騒動といいます。 江戸時代の中ごろから、 があったりして、 年貢や税の不公平 てきました。 村役人たちと農

村役 は 代 災 村役人の不正をめぐって起こりましたから、 の天保 . 人の選出方法が争点となりました。 方騷動 地変や 期に 飢饉などがあい は 北信濃で激増しました。 世紀後半から増 つい だーハ三〇 カロ これ L 年 天

入札制のひろがり

でみられるようになりました。 より高得点者が名主になってい (佐久市) では農民全員の入札 七九四年 ハ〇九年(文化六) 村 (寛政六)、 役人の任期制と入 松代領の南長 幕府領佐久郡北沢 ます。 札 (選挙) 制が各 一八八 池计 世 村 地

> ていきました。 層農民も入札に参 人物が名主に当選するなど、 (長野市) では、 小に 加して、 前とかっ 帳は 彼 下とよばれる下 選挙権も拡大し らが推せんする

す した上で、 場で、 たとほとんど同じです。 補者が当選しています。 まず台帳 ました。 佐 (投票用紙)を有権者に配ります。 (投票)。 久町) 八六三年(文久三)、 その札に本人である確認 このときの入札のしかたをみると、 (有権者名簿) の名主と組頭 候補者の名前を書 その結果、 最多の をつくり、 0 11 入札がおこなわれ まの選挙のやり 佐久 いて札を入れ 票数を得た候 の割り 郡下た 人数 選挙会 印を 海かい 分の 瀬ぜ ま 村

◆女性にも選挙権があった

てあ ど三人の女性が有権者として登録されて 地にみられたことです。 ところで、この入札帳には、 れば選挙 つまり、 女 人性戶 主 江戸後 権 0 があ 村 政 参 ŋ 期 加 0 村 政 村では、 は その後明治 1= 参加 近 宗太夫後 世 後 できたの 女性も 期 政府に 戸こいま 信 家け 7 な

各

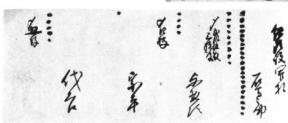
を知ることができます ことを考えると、 よって、 いっさいの女性参政権が否定され 江戸時 代 0) 庶民意識の高さ 青木歲幸

t=

和了事 中学好意度



を表れ



半右衛門らが名主と組頭の入札に参加したことがわかる。組 頭は右馬之助が30票で当選した。

原本は国立史料館蔵)



信濃の国の特産物を運んだ中馬の荷鞍(根羽村歴史民俗資料館蔵)



濃国 の産物を運んだ中馬

宅配便 の起源







よる運搬

がおこなわ

れていましたが、

物

0

輸

送

0

多 船

ŧ

0

があり

ます

ね。

信濃国では千

曲

11]

や天竜

11]

7

も長

距離

ラッ

7

0

中には派手な装

飾で走っ

7

11

る

える

中馬」

付けて

た布のデザイ

ンです。

今 11

東

これらは

江戸時

代

0

宅配便とも

松

0

根を引き抜く金太郎、

大波と亀

雲と蜂、

大

塩俵を運ぶ中馬の姿 (長野県立歴史館常設展示)

で道

中には危険な所も多く

あ

n

ま

馬子ご

自

0

馬に着

せ

た衣装

0

絵

物資輸

送を

担

は

馬

牛に頼

てい

険

11

山

坂

4

渓谷を行

主から せん 問ん 事 有力な輸送手段に 6 屋や江 間 戸 が出され には、 時 送り先まで 独占し 代 0 て以 物の 安全 7 江 F 七 なり 後中 直接農民が 輸送ははじ 前期から荷物をめ 四 0 がらに 年 願 馬 は 11 正 明 n かい 式 自 かい れ 8 弘 和 分の 1= 中 街 め 元 認 馬 対 道 5 8 ぐる争 馬で荷物を運 0) れ 5 幕 7 宿 てい 信濃 府 場 九 にお 0 11 中 が絶 信濃 可 か、 問 た彼 玉 -1: は れ 裁さい 0 屋 仕 t

粋を競った信州中馬



-覧」部分 1872年 国立公文書館蔵)

産物

数

多く

あ

りまし

これ

らを東京

運ぶ

中

漢方薬

0

原

料

なる草

木や

熊

皮

.

狐皮など

山

独

特

蕎麦

粉

細

. 砥といし 栗

٠

石炭

.

石

油

硫い

.

銀

工〈

石

灰

蠟

石

品品

など

かい

提

出され

ます



蚕種は

山繭

麻

布

.

和 類

葉煙

蜜

の産

米

以

外

約

種

あ

n

生糸と

寒天

蕎さ 物

竹籠

.

盆

元

大戦・世界の

地じ

椀ん

足袋底

.

干蕨

•

・が、淡色餅

展を支えました。 なる明 明 たち なる 後 まし と中

馬

会

社

2

7

編

成

n

围 の産業と

煙が形草でに なけ あ あ ŋ n 明 県 治 歌 れ 物 た産 は ね。 元結 物を 0 8 江 ひ 万ず F 0 玉 とは 時 ウ 工夫を重 代 足 1 は は 現 0 5 信濃 金収 江 わ F 力 ね X 29 国 でも 事ぞ な 0 博覧会に から を得るため 0 平 知 5 生産 は n 肥ひ 沃さ 出 して た産物でし X 11 0 和 5 地 た信 歌 物 to 言 地 かい から

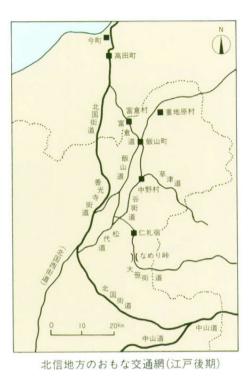
期まで長野県の 会社の社員となり、 は中牛馬・ちゅうぎゅうば 人びとの生活や 鉄 道 かい 輸送 文化 0 主 0 発 役

村人の土木工 快適な道路づくり



なめり峠付近でみられる、 高さ 1~1.5行ほ 手道と旅人の安全を祈るために立てられた 石仏

0



大笹街道の土手道

おおざさ ろを発見されました。 大笹街道 途中ではぐれた一人は、 よる輸送をしてい かかった地元高井郡仁礼宿 沢温泉村) の冬奉公 七八四年 0 なめ の百姓一〇 (天明四) 一〇月、 n 出かせぎ)に た百姓 峠で吹雪に 人は、 雪に埋もれて死んでいると、 1= 須坂 現金収 あっ 助 出発しました。その途 けら (市)の馬士衆 で道を見失い、 高井郡重地原 n 入を得るため ました。 村 馬に か、 通 1n 野 中 江

旅人 すが 道 きたので、 富倉峠の石 畳 善光寺平(長野盆地) 手道」をつくりました。 は道を見失わず なめり 四八年(嘉永元)、仁礼宿と小県郡横尾村遭難するものがあとを絶ちませんでした。 中山道でしたが、 その上は降雪が強 多くの旅人や商荷物 峠 ・大日向村 付近は天候が荒れると道がわからなく 大笹街 馬も歩きやすかったのです。 から江戸 11 風で吹き飛ばされるので、 ずれも真田 土手道は盛土をした道で 道 かい 0) 通 II への主要道は n うが旅程を短縮 ました。 町 かい 共 北国 真なだ 同 街

52



て使われた敷石。幅 1 尺 5 寸(約45センチメ ル)、長さ | 間(約180センチメートル)の敷石 | 枚分の代金 て寄付金が集められた。



刻まれた記念碑



合街道の馬のほか荷車や人力車もみえる。 明治初期の中野町では、 草津道の牛、 (「信濃国高井郡中野町製糸場水車器械略図」部分 中野市 小野澤貞晴蔵)

to

丰

よぶ舗装道路が完成しました。ハ六七年(慶応三)には、総列

町まち を

一越市直江

0

船

屋や

越

中

富

Ц

0

商

総延

長

129

飯

山

町

0)

塩問

屋や魚

問

屋

0

II

今ま 付

がまかなえなかったの

寄付

金を募

ŋ

を敷こうと計画

ました。

か

し富倉村

だけでは

費

用

と足もとがぬかるみ、

通行にたい

へん苦労しまし

八五七年

(安政

四)、

富倉村

では

道

1=

石

山市)

あたりは

土壌

地形などから、

雨

かい

降る

F 代になる 時 カ 0) 車 道 道 路 1= 馬 か かい 車 わ かい 江

江

時

かい

明治時 カロ 力車 F 馬車の道 時 から 0) 駄だぎゅう 馬ば

が変わっても人々 0 切実な願 0 あ 7 5 5 れ わ 道 n いだったのです。 幅 が広く 快適 勾配い それ 配が 一路は、 緩る

よる輸送をし 田だ 市 田丁 1= 上 越 11 市 3 高 塩や海 た百 田 姓 から 產物 たち 善 0 光 多 北 て富倉 部 追お 0) 峠 飯 Ц 4 田丁 越

飯

Ц

高か

えて運ばれました。

北

街

道を通るより

ŧ

距離が

短

屋での荷の

替えも

なかっ

たの

運賃

が安

荷

たまなかっ

たからでした。

か、

水の

内ち

郡

富倉

村

旅行のはじまり

庶民が求めた快適 で自 由な旅





善光寺のにぎわいと門前のみやげや。 (『地震後世俗語之種』 真田宝物館蔵)

桔梗の咲きみだれる野を行く旅人たち。現在の 塩尻市桔梗ケ原のあたり。

(「諸国名所百景 信州桔梗乃原」 長野県立歴史館蔵)

0 旅 の目的と定宿

期に 村役 なると、 和な時代が続 人や町役 多く 人に 出での て道路 稼せ 届 かい () 17 寺じろ社かい や宿場 出 和 ろな 簡 目 単 湯治が 的 往 旅 れ て目 形が的 江 3 0 F 場 中

遠は国江からな 参 らえて旅立つことができました。 0 目 的としてもっとも多かったの わ 岡 の三峰 秋葉山、讃岐回 国 信

濃

0

善

光

寺

0

参

香川

0)

は

伊い

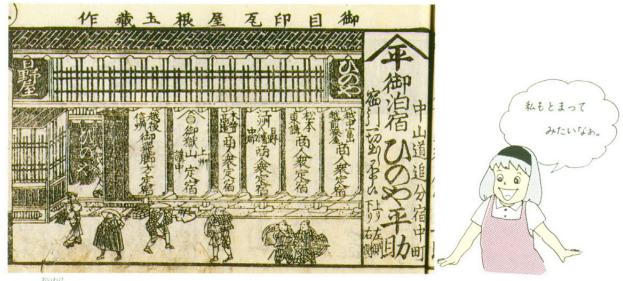
勢せ

神宮

0

金比羅宮、

は渡れた。を掲げ 館に わら 計 また宿場 1= 立 5 相 京や 2講が有名で、各地の安心して泊ま 寄つ るところも多くありました。 の旅 旅は寺 典型的 大 旅 坂 0 の繁華街 籠 0) 社 な旅 参り な 名 物 0 かい 目 0 飲み食 目的 的 宿 地で であっ 現 た。 0 + 旅 定宿 ても、 立 道 行会社 ち 11 物 れ 寄 中 0 る 組織 名所 日 記に 旅龍 0 7 指定 カジ 旧 谷 跡き 旅 板



中山道追分宿(軽井沢町)にあった宿屋の店先。 定宿を示す看板が多数さがっている。 (「諸国道中商人鑑」 長野県立歴史館蔵)



旅のガイドブックであった道中記や定宿帳 のいろいろ。(長野県立歴史館蔵)

あ

天保

のころ

は盛

h

利用

福

島

0

関

所

をは

do

他

0

関

所

もそ

れぞ

九

抜

H

道

高高

原

田丁

栅

を抜

17

中

Ц

道

木

録されて 庶民によく利用され

少年の抜参りと女性の関 所 破

詣者 諸 ときに かい かい か、 役 年 る抜参り 行しまし 難 発 見 間 0 江 かい F 每 七〇五年(宝永二) 脇 村 0 後 年 本 か、 日 11 役 か、 関 期 t ちだんと増えました。 n IE 記 陣 ばは所 るよう 月 小 磔 六日 破 なると関所付近 よると、 われる旅で 御蔭参り 林葛 寺 頼 7 ŋ んで 2 女性 参拝 をすることも 古夫妻ら三名は手形 なり 案内 年) は 連 伊 の旅にでま 領主の 日 n 四 たが 勢神 歳 0 以 を 旅 0 後 抜 か 0 宿場 あ 定着 許 八三二年 参 上 宫 け、 n は n 可 田 女性 抜 を などでも往来 町 0 n 闇ゃた。 得 17 出 歳 征印お 以 夜ょに な 道 ることが享 上 蔭げ (天保 0 後 な を使 手 満 伊 田 11 関せき 7 関 形 涂 n 0 市 7 川が中 越 所 0 は 青 旅 かい 後 関 破 手 少 発 0 0 1= 大 形 年 所 宿 111 n 田丁 参 玉 出 流

信濃では月と仏とおらがそば

RAR 30 REE

たなだ。 うつ たごと 棚田に映る田毎の月の月見のようす(『信州更科田毎の月』 長野県立歴史館蔵)



氷がはった諏訪湖の上を歩く旅人たち。旅人たちが歩くところは黒く汚れ、対岸には 高島城が描かれている。(『信州諏訪氷之図』 長野県立歴史館蔵)

得ら to 11 訪 道 知られるようになっ 科蕎麦は信濃国 東 湖 旅 諏訪湖と浅間 わ湖の氷」として上 甲州街道など 信州 姨捨の月と善 る俳 0 0 れるようになったことがその背景にありました。 れは信濃国の名物を詠んだものとしてよく 出版物が普及して 交通が発達して人や 人たちがい 氷上の歩行は 関脇に位置 かしこれらの名所 川諏訪氷之図』 ようまかこおりの ず 句です。 浅間 また「浅間 Ц 描かれ は の名所と名物を代表する三本の柱 するほど日本 光寺信仰は古代から 更科の名月、 の主要な街道が通 たのは 諸国名 よこくめいざんこうぎんまり山のし 山のけ 大日本国中ふ には結氷し 位に 度に多くの 物の交流が活発になったこと 江戸 名物が広 掲げ 時代になってからでし 中 江 善光寺の 1= 5 F れるほ 0 た 時 < 知 人が共通の 5 諏 全国 7 相ず 知られてい 阿弥陀仏、 撲き位 訪 n 0 た山でした。 ました。 諏 湖 0 位置 知ら 0 訪 0 人びとに なか 情 上 知 东 れ 中 步 更 諏 Ц n



1846年(弘化3)に出された諸国の不思議一覧。「すわ湖 の氷」「浅間山のけむり」が上位にあり、行司として戸 隠山、頭取として善光寺が入っている。 (「大日本国中ふ志ぎくらべ」 長野県立歴史館蔵)

に

ば

れ

各

地

1=

広がっ

7

11

きま

した。

また

諏

訪

0

針

箱 喜

など、

今では

なく

なっ

てしまっ

た名

物

ŧ

n

物

たのでし

しよう。

どんな味がしたの

ょ

う 店

ね

ま

す。

猿

馬

場

柏

餅

は

善

光

寺

街

道

0

峠

0

茶

0 あ

名



追分原から見た煙をあげる浅間山 (「諸国名所百景 信州浅間山真景」 長野県立歴史館蔵)

係

かい

な

名

所

2

は

な

5

な

か、

0

た

0

です。

2

0

点

煙

をは

1

浅

間 2

山

は

碓

峠

を

越えて山麓

0

中

山

道を旅

す

る

目ま

0

当たり

することができ、

山

腹

氷い

形於時

对

象

に

ŧ

な

0

7

11

な

か、

0 す

たからです。

関

4

岳

40

穂

高

連

峰

は

登

山

る

がな

また 生活

雪

11

7

ス

0

山

to

ま

かい

IJ

2

h

0

7

11

ま

せ ん。

n

は

当

ただ

現

代

0

長

野

県

を代

す

山

岳景

観

であ

る

日

本

諸国に知られた名物

1=

鯉 た

0

雪

形

かでる

親

L

2

0

ある山でした。

5

す。 時 0 地じ 猿馬 名 か 諸 産 5 玉 お六櫛 品品 知 0 5 て かしわ 名 柏 諸は れ 物 餅も よこくめ 軽 玉 た名物だったのです。 を集めた かい くてかさばらな < 名 紹 物類聚』 知 諏 介され b 訪 n た 諸国産物 針 てい 順 箱 7 ます。 は 11 たば 右 真なだ のでお土産と 鑑ががみ お to 加 織が 六 は え 櫛 7 は ŋ かい 更 蕎 登 信 科 麦 場 真 は 蕎 は 7 木 田 玉 帯がま 曽 旅 当 0



池田屋武右衛門ら18名が1862年(文久 「ほうのう に奉納した鏡。高妻山の頂上を阿弥陀仏に みたててささげたもの。



戸隠連峰の最高峰高妻山。御裏山とも呼ばれた。 山頂へは険しい縦走路がつづく。

江戸時代になってからです。

ませんでした。

山がより広く庶民に開

かれたの

は

水内郡が村又吉、

善光寺町

さ四

〇キロあまりもある青銅の鏡が立てられています。

柄を含めると高さニメー

重

以郡布施高田村(長野市) な よせたかだ 山を信仰する埴科郡松代町

町

長野市)

の吉

の平林忠兵衛

径六三センチ、

連峰

すの高妻山

標高二三五二メ

ル

0

山

頂

す。

文久二

に鋳 造して山頂に運びあげたもの

の池田屋武右衛門ら一八名が、

吉村又吉は先達とよばれた行者です

高妻山の大鏡

岳を信仰 江 戸時代以前から、 の対象としてい 高くて険し た行者以 外登ることができ 山 は 猟師や 株に

槍ケ 群山脈の槍ヶなり 生の初登頂

が登山をするのにはどんな苦労があっ

住む庶民といえる人たちです。

江戸時代の

他

は

町

たのでし

野 0 山 岐阜の県境にそびえる日本第五 驒だ 初 めて登ったのは越中国 岳は 標高三一 ハ〇メ (富 位 の高峰です。こ 山県) ル 出身 は 0 長

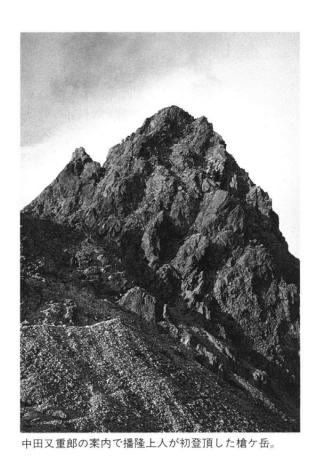




明治のはじめごろの御嶽山。田ノ原周辺に小屋がつくられている。(「西筑摩郡村誌」 長野県立歴史館蔵)

ポー

としての登山が行われるのは明治になってから



播隆上人でした。上人は安曇郡はのりゅうしょうにん

小倉村

(三郷

村

の農民中田又重郎を道案内に

一ハ二六年(文政

な岩場を登るのは命がけのことでした。

一八三四

年

7

四

天保五)

には山頂直下の岩壁に又重郎らによっ

うな山小屋や登山道もなく

九)八月、

初めて槍ヶ岳の山頂に立ちました。

今のよ

草鞋ばきという装備で急

御嶽登山のひろがり

保

門から提供されたものでした。その後一八四〇年

一)綱は鉄の鎖に付け替えられています。

登れるようにと野沢村

(三郷村)

の庄屋務台与

右衛

天

般の人も槍ヶ岳に

○メートルにも達するこの綱は、

善の綱」とよばれた綱がかけられました。

四 が登拝の許しを得る運動を続け、 天明年間 「道者」と呼ばれる限られた人だけが登れる山でした。 の覚明行者は役人から弾圧をうけながらも黒沢 つぼう木曽の御嶽山 初めて一般の人びとの登山が許可されました。 (一七ハー〜ハ九年) からの登山道を開きます。 (標高三〇六三メートル) に尾張国 一七九二年 以後木曽の村 (愛知県) 寛政 は 出 ス 口

山を庶民のものとする活動があっ

たのです。

(橋詰文彦

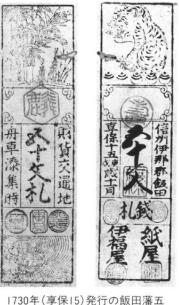
それ

以

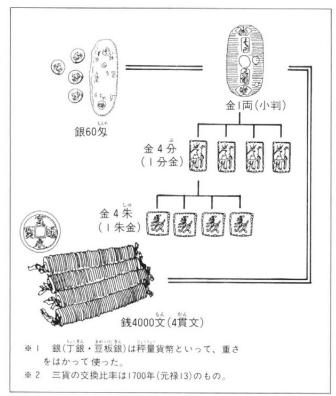
前の江戸時代から困難を乗り越えて登

信州の紙幣

―信用経済のひろがり



十文銭札(表・裏) (写真提供 (財)八十二文化財団)



江戸時代の貨幣制度

江戸時代の通貨

東ではおもに金が、大坂を中心とした上方では銀が使し、貨幣の統一をはかりました。江戸を中心とした関江戸幕府は、金・銀・銭の三種類の金属貨幣を発行

▼藩札の発行

両替されて流通していました。

わ

毎日変動する交換比率によって三種類の貨幣

行しました。 (寛文元) に銀と交換できる銀札を発行し っさい発行しませんでした。 幕府は、 自分の藩だけで通用する藩札という紙幣を発 福山藩でした。 一八六七年(慶応三) 最初に藩札を発行したのは、 しかし まで紙幣 玉 内の多く (お札) 年 玉 を

藩は、 藩 三〇年 札 広島県) 札 (銭札) 使用にあたっての触書には、 七〇四年(元禄一七)、 財 政赤字をうめようとしたのです。 藩札との交換によって領民の持っ (享保一五)には金札と銭札を発行しました。 を発行しました。 飯 二万石の 田 藩 領内での藩札 が信濃で最 小 その 7 藩 11 後 た銭を集 以 初 外 0 飯 藩 0 t 田



高井郡桜沢村(中野市)の藤牧家では、 同郡相之島村(須坂市)の)2月21日、 紬嶋・真綿・栗落雁・寿留女と並んで「小布施酒札弐升」を贈ったことが わかる。(「諸義理進物諸納覚帳」 中野市 藤牧弥之助蔵)



砂糖札(上田原町 近江屋彦八) (写真提供 (財)八十二文化財団)

to

0

X

年

通

ŧ

かい

7

かい

な



茶札(表・裏 上田海野町 山形屋善之烝) (写真提供 (財)八十二文化財団)



酒札(伊那郡飯島町 ぬかや)

(写真提供 (財)八十二文化財団)

れ

11 1

す。 た、 毛利家 記さ 示され 札 贈答品などとしてつかっ ども発行されました。 使 んのご祝儀をもらっていますが あ き発行された藩札はまもなく使われなくなりました。 藩 だに透か 天保一 水の内ち を持 ŋ 商品券のはじまり 札 用 信濃では、 れて 11 その種類には、 ました。 禁 北 孫 以 信の たことがわかる記録が多数載 東信 0 祝 0 郡 外の貨幣使用も 止 五 てい しを 11 H to 飯 各地に • ました。 藩 記 山 しかし ったことが記されています。 南信では 藩札のほか、 11 札 町 苗字帯刀を許されたお は、 れ 祝儀として、 から貨幣 に残る祝儀帳などには信では現物が数多くな また、 て、 飯 藩 酒 一八五二年 山 翌年の 簡単に 商品 札 認 札 市 高井郡 8 7 は 茶札 宿場 5 0 札 の島津家は、 交換 3 は 偽ぎは 白米二升などととも n 尚造できな な 中 商 札 るように せ札使用がきっかけで ŋ (嘉永五)、 品券の 石少 今日 合 手 酒札が三〇 山 は、 糖札 残つ 田 町 数 わ 祝 7 村 せ 0 村 料 てい なり、 た和 商 11 ・肴札など ようなも わ な 11 札 ます。 品札が、 高 たし I ます。 件 夫 紙 近 商 山 館林弘毅 たたち 品品 隣 村 かい 以 四 0 細 のと F 流 7 1= 四 0 あ 札 か、

酒

百

宣伝広告のはじまり



戸

から善光寺にいたる街道沿

0

商

店

の広告が

0

0

7

戸

で発行されました。

「中山

道

善光寺之部」

は

江

諸国道中商人鑑』

は

_

ハニ七年

(文政

0

江

は

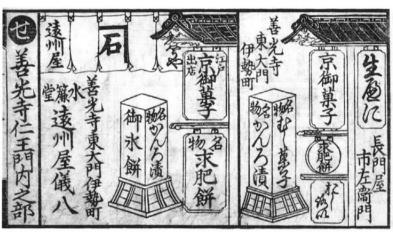
江

戸時代からです。

いるといえます。

このような広告活動がはじまっ

たの



菓子を売っていた善光寺門前 の店の広告。長門屋は紅、白 粉など化粧品も売っていた。 (「諸国道中商人鑑」 長野県立歴史 館蔵)

んできます。

看板の多さは商業活動

の活発さを示して

|商店のガイドブック||諸国道中商人鑑

街にでるとお店や会社のいろんな看板

か

目

1=

飛

びこ

◆店先の看板

まし

しよう。

みられます。

くさん出した店の広告ほど大きく載っています。

人がはらった宣伝料で出版されたもので、

運びやすいガイドブックの形式です。

この

本は商

店

0

宣伝料をた

なか

ます。大きさは縦一三センチ、

横

九センチで持

ち

にはお金が払えなかったりして塗りつぶされた広告も

この本から当時の宣伝のようすをみてみ

屋根 れています。 店先にはさまざまな商品 かい つけら 看板とそれを支える柱の上にはり 机 雲や波のような彫 名 が書 か n 刻 た看 まで付 板 かい 11 掛 0 7 ば 17 な





看板を4枚も出していた上田海野町の柏屋の 「太物小間もの荒物瀬戸物其外御望次第」 客の注文によって商品を取りよせ

(「諸国道中商人鑑」 長野県立歴史館蔵)



上田原町の宿屋真田屋の広告



鴻巣宿(埼玉県)の旅人宿の広告。 (「諸国道中商人鑑」 長野県立歴史館蔵)

0

薬

11

か、

1=

ŧ

劾

き目がありそうな感じです。

鼠

屋

0

建

物

かい 板

看

板

1=

なっ

たような造りです。

商

品はこども

屋

0

看

は

た

ん凝

たも

0

まる

お

to

お

るも

0

もあります。

たとえば

上

田

原

町

上

田

市

のね

鼠ず

のほ

かい

1=

ŧ

薬

0

宣

伝

にがたい

ん多く載ってい

ます。

2

れ

だけけ

庶

民

1=

求

8

5

7

11

たの

光寺

門

前

の長門日

屋の

看

板

は

京菓子、

求肥餅、

紅に よう。

白粉

など菓

子

と化

粧

また行灯が

型

0

看

板

t

あ

つ

名

物

か

(「諸国道中商人鑑」 長野県立歴史館蔵)

宣伝文句(キャッチコピー) のいろい 3

灯されたのでしょう。

ネオンの源

流

でしょうか。

んろ漬」などと書かれています。

夜になって明

か

ŋ

かい

す。 て即功う 木 あ 7 あ b n ŋ 商 ます。 ます。 せてい ることをうったえて 品の宣伝にはキャッ と宿引きは 宿引き一切出し申さず 世 ある < ました。 事神 当 さの薬多し 時 宣伝では 宿場では 妙なり」 切して また で対能之儀 きっチコピーが 宿 チコピー 11 11 などと他 ます。 屋 ませんと 江 候 へども 0 F より 強 引 私 宣伝 な客 方商 0 書 右 わ 0 商 側 競 17 世 11 品品 女差 2 引 争 7 i= 7 7 きが旅 より 御尋ね 0 知 11 11 出 始 薬 る n る 可 宿 ま す ŧ る 不申す 屋 ŋ 勝 所 0 を n な n

く宣伝効果の

ある内容が工夫されています。

(橋詰文彦

候

場

所

0

案内

を

n

た店

ŧ

あ

ŋ

わ

か

n

to

木曽の森林はどのように 育てられたのでしょう

木曽の木材の伐採

割までがミズナラなどの広葉樹でした。 なったのです。 広葉樹も伐られたので、 1= れていますが、 香の入浴剤も販売されています。 なる桧などの伐採が制限されるとともに、 桧が出す香は健康によいとされ最近は (上松町)は「森林浴」 木曽の森林植生はもともと七 現在のような植生に の発祥の地とさ 赤沢自然休 用材 桧 0

でした。 なると地面がむきだしに 木がどんどん伐られ、 た。その結果運 直接支配され、 「尽き山」となってしまいました。 (保水力) が失われます。 や名古屋に大きな城や城下町が作られ それらの建設のために多くの木材 土桃 木曽は豊臣秀吉や徳川家康によっ 山時代 搬に から江 木材が大量に伐りだされ 都合がいい川のまわ めぼ 戸 時代のは そのため降った雨 なり、 しい木がなくなる 水を保 じめごろ 木がなく かい 一つカ りの 必要 まし まし 江

0

い規制がありました。

然災害が急に増えました。 がいっきょに山から流れだし、 洪水などの自

きびしく制限された木材の利用

n

た「巣 本曽五木は「停止木」とされ、自分の屋敷の留山以外でも桧・椹・明桧・高野槇・鼠子の 尾張藩に編入されました。 また山火事の原因になる山焼きや だけで首をはねられ見せしめにされました。 れ 3 した。 村 (南木曽町) なかにあっても伐ることが禁止され 「留山」をもうけ住民の立ち入りを厳禁しまとのやま 一本首ひとつ」といわれるほど厳しく罰せら 「鞘山」をもうけ禁伐林をさらに広げ 喫煙などにも厳し ました。一六六九年(寛文九) のお触れをやぶって五木を伐る者は、「木 一六一五年(元和元)から木曽は名古屋の 4 その後 0 ほかに一六六五年 「巣山」 の権右衛門は槙の皮を剝 留 藩はもともとあっ 4 のまわりに 切畑、 筑摩郡 (寛文五) ました。 ました。 山で だ

> られた漆器や曲物はこの白木利用は認められていました。 年六〇〇〇駄の白木 できないのは大変不利なことでした。ただ毎 からです。 たものです。 良質の木 尾張藩 山 林を焼きはらって耕地を広げることが が木曽山の森林を厳しく管理した 平地の少ない 材を売り、 (製材した短い材木) の白木を使って生産 藩の収入にあてていた 木曽谷の農民にとっ 名産品として

は

し育ててきたものといえます。 制 限や負担にたえながら、 木曽の森林は木曽谷の人びとがさまざまな それを大切に利用 橋詰文彦



木曽谷の桧の森林 (長野県立歴史館常設展示)

テーマ 4 生活文化のたかまり―庶民文化の発達―



さまざまな絵草子 (長野県立歴史館蔵)



諧 が庶民にひろがった



|82|年(文政4)の俳人番付『俳諧士角力番 組』。一茶は差添役となっている。 (上田市立博物館蔵)

を学ぶ

.:.

2

0

指導で生活できる時代

俳

師

も

信

濃

0

各

地

出 俳

俳

がふ

茶

0

0

指

職

文政

期

/\

四~三〇

ごろ

か、

俳



一茶の旧宅の土蔵。15歳で奉公にだされ、51歳で故 郷に戻った一茶はここを拠点に北信濃の門人たちを 指導した。この土蔵で一茶は生涯を終えた。

たの

明

時 は

正き

岡された。

子規が問

提

n

ま

L

諧を

俳

句

よう

から流行

俳句

た連歌が江

の発明時

句〈代

最

初

0

だけ

を

取 室

n

出 時

田丁

柏

信

町

0

俳

小ばば

茶さ

0

俳

句

や親

0

な

11

俳諧師がでてきた

諧を芸術の 九 かるそら 8 0 から 松っ 尾お 0 芭蕉で

江 全国 人たち 戸 F 中 倉 0 期 がでてきま がでまし 3 諏す 訪ゎ六 宫 から、 本天ん 人以 出 河か 合曽良で 松代ろ 11 上 たと 田 芭蕉 士 カロかの わ 舎白雄 れ 信濃 田た 葛かっ 門

66

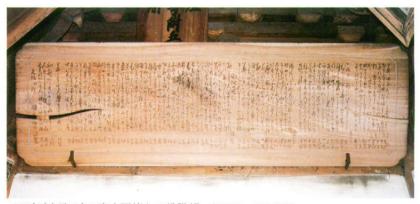


沢有節の俳諧短冊 (上田市立博物館蔵)

ろが

n

があったからなのです。



1826年(文政9)の宮本天姥らの俳諧額。(長野市 長谷寺蔵)

集落

(二二戸) から七人、

隣の千木は

約三〇

F

一人が出句

してい

ます。

つまり

F

数

の三

分

0

五

29

年

嘉永七)

0

俳

諧額をみ

ると

地

元

0

学芸	人	比率	学芸	人	比率
俳 諧	109	42	漢詩文	33	13
書	74	29	花	15	6
狂 歌	45	17	その他	31	12
画	44	17			

『信上当時諸家人名録』にみる学芸にたずさわった信濃人は延 べ351人。 重複をのぞくと実数259人。比率は、学芸人数を実 数で除したもの。(出典:「長野県史」通史編近世6)

水の

俳

をたし

11

まし

内 ちかい

郡

小ななべ 諧

村

長野

市

0

小お

田だぎり

神

社

奉

7

国にれ

見みた

納ら

名

かい

記され

いますが、

信濃

の二五

九

人

0

う

5 机

約

四

割

濃の

長野県)

と上野

群

馬

県

の学芸にすぐ

た

人

0

上当

録

三六

年

刊

1=

は

信な

る沢有節

う有名な俳

諧師

に

なっ

たこともあり

五

八年

安政

五

1= は

関西

俳

壇で

筆

頭

0

地

位

を占

do

大

I

かい 俳

俳

諧

夢中になっ

て家を出て京都

1=

住

L み、

かい

たの

小県郡生塚

村

上

田

市

0

在、 長野 江 F 県に う学芸が職業として成 時 代 の文化 は二 ほどの 文政 俳 期 以 句 降 n 7 立 のこのよう ル つよう 1

かい

あ

n

0 です

作諸のひろがり しんじょうとうじしょ か じんめい